

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ～灰より生まれし王～

schwarzschild

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 〜灰より生まれし王〜

### 【Nコード】

N4467W

### 【作者名】

schwarzschild

### 【あらすじ】

少年は大切な仲間を失い、暖かな温もりを奪い去った。そして手に入れたのは望んだ力と得るはずもない記憶。時は過ぎ、新暦75年。ある者は反旗を翻し……ある者は陰謀を企て……ある者は復讐を始める。様々な思いが交錯するなか、幽霊と謳われた青年レオ・メイソンは何を思い、何を考えるのか。schwarzschildがおくる、もう一つのリリカルなのはStrikers。どうぞ、お楽しみ下さい。\*本作品は二次小説にあたります。

## 予告編（前書き）

初めまして、schwarzschildと申します。

今回、魔法少女リリカルなのはStrikersの二次創作に着手させていただきました。

小生、まだまだ未熟者ですが、どうぞこれからのお付き合いよろしく願います。

\*この予告編には少々ネタバレの要素が含まれているかもしれませんが、どうか悪しからずご了承下さい。

## 予告編

schwarzschildが描く、もうひとつの魔法少女リリカルなのはStrikers

「今日こそ、貴方を逮捕させてもらいますよレオン！」

「ご丁重にお断りさせていただこう！！」

燃え盛る空港。

「これが火災の原因となったロストロギアや」

「これが……！？」

原因となったのは高エネルギー結晶体・レリック。

「本日より、高町なのは一等空尉」

「フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官」

「両名とも機動六課に出向となります」

「よろしく願います」

救助を行った少女たちは、四年の年月を費やし新たな部隊を立ち上げる。

「機動六課設立や」

物語はここから始まる。

「マスター、時間です」

「ターゲットリンク完了。オウル、サイレントモード解除」

六課を襲撃する仮面の男レオ・メイソン。

「骨の一本や二本、ここで折っておいたほうが良さそうですね」

「言うようになったなセレスティア」

彼が追うのは謎の武装集団・レンツクネヒト。

「デイベインバスタアアアアー」

「鳳凰烈火斬」

六課はロストログアを巡り彼らと対立する。

「あれはガッジェットドローン!?!」

動き出す、もう一つの勢力。

「素晴らしい！　素晴らしいぞ！！」

天才科学者ジェイル・スカリエッティ。

「わたしの作品はやはりいい出来だな」

「順調のようだね、ジェイル」

生み出された無限の欲望は

「さあ、祭りの始まりだ！」

さらなる高みを目指す。

時は新暦75年。

平和を謳うミッドチルダに災いが降りかかる。

「通信管制システムに異常！　クラッキング！！　侵入されています  
！！」

地上本部に襲いかかるのは

「AFM濃度が高い。魔力が結合できなくなっています」

「通信も通らへん……………やられた！」

無数の機械人形。

「電子が織りなす、嘘と幻。銀幕世界をお楽しみあれ」

「IS発動ランブルデトネイター」

「バレットイメージ・エアゾルシエル」

研磨された戦闘機人。

「良しなに頼むぞ」

「おまかせあれ」

強大な人造魔導師たち。

「裏切ったな、スカリエツティイイ！！」

そして、明かされる

「あなたたちはここでご退場願います」

「き、貴様の主は我々が売ってやった恩を」

「黙りなさい！ 老害！！」

壮大な

「もっと激しく！ もっと強く！ わたしの舞台で踊ってください  
！！！」

陰謀の数々。

「ついの目覚めたか……………忌まわしき箱舟、聖王のゆりかご」

そして、青年の選んだ未来とは

魔法少女リリカルなのはStrikers ㄥ灰より生まれし王ㄥ

毎週日曜更新予定



## 予告編（後書き）

いかがでしたか？

今回は予告編でした。

次回からは本編に入っていきます。

更新は明日予定です。

それでは、また明日お会いしましょう。

## **P r o l o g u e (前書き)**

皆さんこんばんわ。

今日は予定通りの更新を行います。

それでは、どうぞ。

## Prologue

地には骸の山。

灰が落ちた空は混沌としていた。

「いつまでだ……」

低く唸るように男は呟く。

彼は一对の剣を携えた騎士。

その鎧にはすでに輝きはない。

男は全身を血で染め上げ、鎧は赤く、いや黒く変色しているのだ。

男が剣を振るう度、己の身に血が吹き付けられていくその血によって。

「いつまでだ……」

男は眼下に集う者を見て再び呟く。

男を囲むのは百にも上る騎士たち。

騎士たちは王国の旗を掲げている。

「いつまでこんなことを続けなくてはならない」

男の瞳に映るは大切な者を失った悲しみ。

男の心を埋めるは激しい憎しみ。

そして、体が為すは己を焦がさんとはかりに燃える憤怒。

「我々が……………」

血の拭うことさえない異様な男。

彼に向かって百の騎士が殺到する。

一閃。

向かってくる騎士たちに向け男は剣を薙いだ。

生まれた斬撃が騎士たちに悲鳴を上げることさえ許さず飲みこんでいく。

「我々が望んでいたのはこんなものではないだろう！」

悲嘆の声を上げる男。

されど、それに答える者はいない。

「……………そうか」

男は剣を納め、自らが手にかけた騎士たちに一礼をすると、その場を去った。

この戦場でも死ぬことはなかった。

だから、進み続けることを止めない。

どんな犠牲を払ってでも、何を失うことになるうとも。

いつか報われる、その日を夢見て。

## Prologue (後書き)

今回はプロローグということで短くさせていただきました。

1話あたりの文字数なのですが、基本5,000字〜10,000字を目標に書いていきたいと思います。

まだまだ、至らない所はあるでしょうが、温かい目でよろしくお願いします。

## 次回予告

眼下に広がる地獄絵図。

ぶつかり合う灰色の魔術師と黄金の騎士。

救助活動を行う少女たちは

謎の魔導師に出会う。

魔法少女リリカルなのはStrikers へ灰より生まれし王へ

## 第1話 『空港火災』

テイク・オフ！

## 第一話 空港火災（前書き）

初っ端からアクセス数が迷走中な今日この頃。  
読者の皆さんのご期待に添えてないのが原因と思われます。  
作者は誠意誠意を込めて対応していきます。

そんな訳で更新日を前倒し！

日曜日までに次が書き終わるでしょうか……？

燃え盛る炎

泣き叫ぶ子どもたち

怒号の飛び交う火災現場に現れた謎の魔導師

彼らの

彼女たちの

目的とはいったい？

魔法少女リリカルなのはStrikers 〵灰より生まれし王〵

はじまります

## 第一話 空港火災

天高く舞い上がる炎塵。

飛び交う怒号。

絶え間なく爆音が響き、獄炎が視界を埋め尽くす。

その日、首都グラナガンの玄関口でもある第八臨海空港は異様な喧噪に包まれていた。

人が賑わう夕刻に発生した空港火災。

火の手は瞬く間に広がっていき、消火活動が始まった頃には空港全域へと燃え広がっていた。

今もなお、ターミナルには人が閉じ込められ、救助を待ち望んでいる。

そして、火災の中心地である貨物置場。

何者かによって結界が張られている。

結界の中では炎がうねるように渦巻いていた。

その一角で異質な空気を放つ者がいた。

灼熱の大地に映し出されるは一对の人影。

片や黄金の剣を手にし、黄金の鎧が威光を放つ。

片や鈍色の剣を構え、灰色のコートをばためかす。

爆発。

地を埋め尽くした炎が渦を巻き、燃料タンクを飲み込んだのだ。

生み出された膨大なエネルギーが熱となり、炎と化し、二人に容赦なく襲いかかる。

忽ち、辺り一帯は爆炎と閃光に覆い尽くされた。



次第に爆炎が晴れていき。そこに映し出されたのは相も変わらず剣を携える二人の姿。爆発に飲み込まれたというのに何一つ傷がない。

「貴様に聞きたいことがある」

「为什么呢？」

騎士が口を開く。

「俺などに構っていいのか？」

「と言いますと？」

騎士の質問に魔導師は疑問で答え返す。

「この惨状を納めるのは貴様の仕事ではないのか？」

「いえ、わたしの仕事はあなた方を逮捕することですから」

魔導師は肩をすくめて見せる。

仮にも管理局の人間。

世界の正義を司る者たちだ。

魔導師には目の前で消えそうな命の灯を守る義務がある。

一方で、課せられたのは犯罪者の捕縛の任務。

広域次元手配犯であり、密輸物の強奪未遂及び特定遺失物損壊等々の現行犯である騎士を見逃す訳にはいかない。

義務と任務、その二つに板挟みとなった魔導師。  
だが、迷うことはなかった。

魔導師が選んだのは捕縛の任務。  
命を救うという選択肢を切り捨てて。

「それに管理局の優秀な魔導師さん達や彼らが動いてくれますから」

魔導師は燃え盛るターミナルビルを見上げ微笑んだ。

空港内を飛び回る巨大な魔力。

躊躇なく、任務を取ったのはこのためだった。

「ならいい」

騎士は納得の表情で話を締めくくると、手にした黄金の剣を構えた。

魔導師も構えを解くことなく、一層のこと剣を強く引き絞った。

∪Explosion∪

デバイス達は主の意図を汲み、魔力を供給する。

そして、二人の足元には古代ベルカ式の魔方陣が展開される。

「今日こそ、あなたを逮捕させて頂きますよ、レオン！」

「ご丁重に断らせてもらおう！！」

二人の姿が掻き消える。

その場に残ったのは強大な魔力。

再び姿を現したのは二人を分かつ中間地点。

交わる剣。

そこで、灰の魔術師と黄金の騎士は壮大にぶつかり合った。

\* \* \* \*

「レイジングハート！」

「救助対象接触まで、あと40メートル」

（待ってて！ いま救助<sup>たすけ</sup>に向かうからっ！！）

狭い通路を縦横無尽に駆け回る少女。

白いバリアジャケットを展開し、杖を携える若き魔導師。

本局武装体の『<sup>エース・オブ・エース</sup>不屈のエース』・高町なのは。

休暇を利用して、友人に会いに来ていた彼女はいま、近隣で発生した空港火災の現場へと駆り出されている。

「次の通路を右です」

「うんっ！」

瞳に映る強い意志。

一人でも多くの、いや火災に巻き込まれたすべての人を救おうとする意志を感じ取れる。

「いたっ！！」

「……おねえちゃん……おかあさん……」

彼女の目に飛び込んできたのは十歳程度の女の子。  
青髪を揺らして泣きじゃくっている。

「マスター！！ 前方より高魔力反応！！ 来ます！！」

「！？」

「Protection」

危険を告げる愛用の杖。  
レイジングハート

なのはは咄嗟にシールドを展開する。

「つつつ！！」

苦悶の表情を浮かべるなのは。

まるで刃のような、研ぎ澄まされた魔力が襲いかかる。

「！？ 女の子っ！！」

重大なことに気付くなのは。

後方にいるなのはにさえ、これ程の魔力が襲いかかってきているのだ。

ましては前方にいる女の子がこの魔力に襲われたら……。  
焦りがなのはを支配する。

「マスター！！」

「あっ！」

それがまずかった。

一瞬とはいえ集中力が乱れてしまったのだ。  
急展開したシールドが持つはずもなく。

「ダメッ!!」

崩れ去った。

もう、なのはを守るものは何もない。

「　　っ!」

∪Remote Shield∪

目を瞑るなのは。

だが、予想した衝撃はいつまで経っても訪れない。

∪Load cartridge∪

「ふえ?」

微かに聞こえてきたのは、レイジングハートではない男性型の機械声。

なのはが目を開けると一寸も変わらない至近距離に銀色のシールドが輝きを放っていた。

「な、なにっ!?!」

シールドはなのはに襲いかかってきていた金と灰の二色の魔力と拮抗したのち、お互いが打ち消しあうように姿を消した。

「前方に二つの生体反応」

一つは要救助者の少女。

なのはが少女の目を向けると、少女を守るように半球状の銀色のバリアが張られていた。

怪我は無いようだ。

そして、もう一つの生体反応。

（たぶん、こっちが）

なのは達を守った魔導師に間違えない。

「前方左上斜め45度……反応ロストしました」

レイジングハートの落胆した声。

なのはが見たときには、すでに誰もいなかった。

（せめてお礼が言いたかったな）

魔導師がいた場所を見つめ続けるなのは。

姿を消した魔導師に少女の思いは届くことはない。

「マス、タア！？」

慰めの言葉を掛けようとするレイジングハート。  
その声は突如、上擦ったものへと為り替わる。

「ど、どうし」

「前方の像が崩壊。このままでは女の子が巻き込まれます！」

崩れいく像。

悲鳴を上げる女の子。

いまやるべきことは一つしかない。

瞬時になのはは判断する。

「レイジングハート!!」

「All right, my master」

気持ちを切り替え、女の子を助けるべく、なのはは魔法を行使するのだった。

\* \* \* \*

「わかった。気を付けてみるよ」

黒のバリアジャケットに身を包んだ金髪の少女、フェイト・T・ハラオウンはウィンドーを閉じた。

フェイトが向かうのは、8番ゲートからエントランスホールに向けての通路。

先ほど救助した方々の情報によると、魔導師の女の子が一人妹を探しに行ったそうだ。

「バルディッシュ」

フェイトは相方でもある斧型のデバイスに声をかける。

「辺りに生体反応なし」

「もう少し進んだほうがよさそうだね」

探している目標は二つ。

片方は要救助者である魔導師の女の子。

もう一方はなのはから報告のあった謎の魔導師。

なのはを助けてくれたそうだが、姿を消した、と言うあたりが何か気になる。

もちろん、救助を手伝ってくれているという可能性もある。

だが、そうだとすればこちらに接触することなく救助活動を行っているのは不自然だ。

管理局側と協力すれば、多くのバックアップもあり迅速に救助が行えるはずなのだから。

それなのに、姿を消したのには理由があるはずだ。

この火災の原因を知っているのかもしれない。

と、フェイトは執務官の経験則から踏んでいた。

「生体反応を発見。ルート検索します」

「お願い」

優秀なデバイスであるバルディッシュはすぐさまルートを割り出す。

フェイトはその指示に従い目的地に辿り着く。

そして、フェイトの目に留まったのは。



「スバル、スバル返事して……お姉ちゃんが……すぐに、助けに行くから」

床を必死に這い動こうとする青紫色の髪をした女の子。

「その子、じつとしてて!!」

女の子に注意を促すフェイト。

「いま、助けに行くから」

フェイトが助けに向かおうとしたその瞬間。  
女の子のいる地面に亀裂が入り。  
瞬く間に崩落した。

「はっ!」

重力に引かれ落下する女の子。  
それを救出すべく動き出すフェイト。

「Sonic Move」

相棒のバルディッシュがサポートする。

「Circle Protection」

「ホールディングネット」

フェイトが駆け出すと同時に聞こえてきた声。

若い男の声と女性型の機械声。

フェイトが要救助者の女の子を見ると、女の子を守るかのように漆黒の半球状のバリアが張られていた。

それもフェイトの進入コースを妨げることがないようにだ。

「きゃあああああー」

響く女の子の声。

フェイトは女の子を優しく抱きかかえると重力に逆らい上昇を始める。

女の子が落下した時のためだろうか。

下方にはやはり、漆黒の網状の緩衝材が張られていた。

「バルディッシュ」

「前方真上に人影です」

上昇を続けるフェイト。

遂に魔導師の姿を捉える。

漆黒のバリアジャケットに短髪黒髪。

そして、朱の瞳を持つ中性な顔立ちの少年がそこにいた。

「待つて！ その君！！」

フェイトの声を聞いた少年はピクリと反応する。

その顔には失態の色がありありと浮かんでいた。

「一体君は何者なの？」

フェイトはバルディッシュを少年に向ける。

「和平の使者は槍を持ちません」

↳ Schatten Bewegung

フェイトの軽率な行動を咎める少年。

足元にはベル力式の魔方阵が浮かび上がった。

「待て!!」

少年に制止を求めるフェイト。

だが、すでにとき遅し。

少年は影に沈むように消えていった。

(彼はいつたい……)

フェイトの頭に謎が浮かぶ。

邪魔する訳でもなく、逆に手助けまで行った少年。

彼の目的が分からない。

「あ、あの。助けて頂いてありがとうございます」

「あつ、うん」

要救助者の女の子に声を掛けられ、フェイトはやるべきことを思い出したのだった。

\* \* \* \*

「おせいな」

現場の指揮を任されている壮年の男ゲンヤ・ナカジマは、いま上がった報告の内容に毒づく。

報告を行ったのはまるで人形のような小人の少女、リインフォース？。

二人は指揮通信車に乗り込み情報の整理を行っていた。

「要救助者は？」

ゲンヤは隣に浮かぶリインフォースに問いかける。

「あと二十名程」

リインフォースはモニターに目を走らせる。

「魔導師さんたちが頑張っていますから、なんとか」

リインフォースは休むことなく手を動かし続ける。

「最悪の事態は回避できそうか？」

「……………」

ゲンヤの質問に答えないリインフォース。

リインフォースは無言のままモニターを見つめ続ける。

「どうした？ おちびの空曹さん？」

心配になったゲンヤが声をかける。

「先ほどから気になる反応があるんです」

「どれだ？」

リインフォースは次々と画面を切り替えていく。

「時よりですが微弱な魔力反応があちらこちらで出ています」

「お前さんたちじゃないのか？」

ゲンヤが言うのはなのは達のことだ。

「いえ、識別反応が無登録なものばかりです」

「つまり管理局じゃない人間が動いているのか？」

「そうなりますね」

「やっかいだな」

ゲンヤは顔をしかめた。

確かこの空港には、時折密輸物が入ってきていたのだ。

検挙してもそれは後を絶たない。

もし、そういった類の物を狙う輩なら、現場が混乱している時に動くこともだろう。

「他に何か情報は？」

ゲンヤは次なる情報を求める。

「これは別のものになるんですけど……」

リインフォースはまた新たな画面を展開する。

「貨物置場のほうなのですが結界が張られているんですよ」

「結界？ こんなところに誰が張ったんだ」

結界を張るのは不思議なことではない。

しかし、誰が何のために張ったかが問題なのだ。

「分かりません。ただ……」

「ただ？」

「ここが火災の中心地点だと思われます」

「そうか」

ゲンヤはひとまず納得の言葉を口にする。

「結界の種類は……古代ベル力式！？」

結界について調べていたリインフォースは驚きの声を上げる。

「すごいです！ こんな物を誰が！？」

「おいおい、おちびの空曹さん。説明をつー！」

突如、鳴り響くアラート。

赤く点滅する文字がその危険度を現していた。

「いつたいなんだ！」

「空港内に無数の魔方陣が展開っ！！ さらにオーバSランク魔導師が新たに3、4、5っ！！」

「な、何が起きている」

明らかな異常事態。

ただでさえ貴重なオーバSランク魔導師がいきなり5人も現れたのだ。

管理局がゲシュタルト崩壊しそうな数だ。

「空港内の生体反応、謎の魔導師を除き全てロスト」

「どういうことだ！」

続けざまに起こる異常事態。

要救助者も含め、消火や救助を行っていた管理局員、数百人が消えたのだ。

「あつ、いえ、バイタル良好。皆さん、御健在です」

コンソールを叩き続けるリインフォース。

「場所は百メートル後方。転移してます！」

「そ、そうか」

もはや、口元を引きつらせることしかできないゲンヤ。おそらく、この転移を行ったのは謎の魔導師たち。やっていることは桁違い。

それで以って、目的は不明なのである。

「オーバーSランク魔導師2名の反応ロスト！ 転移したものと思われます」

リインフォースは矢継ぎ早に報告を続ける。

「続いて、残りの魔導師が上空三方向に分散していきます」

「モニター出るか？」

「ダメです。全てやられています」

その姿をせめて目に焼き付けておきたい。そんな願いも叶わないゲンヤであった。

\* \* \* \*

「何が起きとんや!？」

驚嘆の声を漏らすのは白い騎士甲冑を身に纏い、背中に三対の黒き翼を羽ばたかせる少女。

八神はやては眼下で繰り広げられる光景を見て目を丸くする。



青、銀、黒の色をしたそれぞれの魔方陣が空港を埋め尽くしているのだ。

「みな、退避や！」

はやての前方にいる魔導師に指示を送るが……。

「そんな……」

魔法陣に吸い込まれるようにして消えていったのである。

「どないしたらええんや」

一人嘆くはやて。

目の前の空港火災に途方に暮れる。

「つべこべ考えてもじゃあない」

はやてが気持ちを切り替え杖を構え直した時。

「（はやてちゃん聞こえますか！）」

「（リインー！）」

リインフォースからの念通が届いた。

「（いまどこにいますか？）」

「（動いてないで）」

「（第3ブロックの辺りですか？）」

「（そうやで）」

はやてはリインフォースと確認を取っていく。

「（さっきの魔方陣はなんやったん？）」

「（おそらく、転送用の魔方陣かと）」

目の前に浮かんでいたのは転送魔法陣。

はやてはともに消火に当たっていた魔導師が目の前で消えた理由を理解する。

「（そうなんか。転送された人は無事なん？）」

「（皆さん、ご健在です）」

リインフォースの間延びした声。

はやてはほつと安心して、肩の力を抜いた。

「（なのはちゃんとフェイトちゃんはどないしたん？）」

「（なのはさんは皆さんと一緒に飛ばされて後方に。フェイトさんは反応のあった魔導師を追ってもらっています）」

ひとまず、なのはもフェイトも無事なようだ。

「（うちはどしたらええ？）」

「（はやてちゃんの方に、転送魔法を使ったと思われる人物が向かってきています。はやてちゃんには、なのはさんと合流してもらって、これの対処をお願いするです）」

「（了解や）」

リインフォースの指令を受け、なのはと合流すべく動き出すはやて。

黒き翼が羽ばたき、漆黒の矢羽が舞う。

「（なのはちゃん）」

「（はやてちゃん！）」

なのはとの念通を始めるはやて。

「（とりあえず、無事でええか？）」

「（うんっ！）」

念通のむこうからなのはの元気な声が響く。

「（第3ブロック上空で合流や。いけるか？）」

「（大丈夫！ 任せといて！！）」

「（ほな、待っとるで）」

「（了解っ！！）」

第3ブロックの上空に待機するはやて。

そこに現れたのは。

「あれ、魔導師さん？ あなたは転移しなかったのですか？」

アッシュグレイの長髪をなびかせ、グレイコートを羽織る魔術師であつた。

## 第一話 空港火災（後書き）

少しでもご期待に添えることはできたでしょうか？

小説を書いていて思うのですが言葉とは難しいものですね。

英語が苦手で、ドイツ語、ロシア語を齧った程度でしかない作者は痛感します。

それと、はやての関西弁、おかしなところはなかったでしょうか？  
独特の発音。

取得するまで時間がかかりそうです。

???「俺の出番が少ない」

作者「空気を読んでください」

???「主人公がこの扱い……酷くはないだろうか？」

作者「我慢です」

???「……………」

## 次回予告

報道されるのは本局魔導師の活躍

対応の遅いミッド地上本部

働いたのは初動の陸士部隊と謎の魔導師たち

少女たちは考え

新たな決意を胸に行動を開始する

魔法少女リリカルなのはStrikers ㇿ灰より生まれし王ㇿ

第2話 ㇿ決意、そして設立ㇿ

テイク・オフ

## 第二話 決意、そして設立（前編）（前書き）

投稿最初の週から日曜の更新間に合わず o r z

二日遅れの更新ですみません m ( \_ \_ ) m

静寂を取り戻した空港

残ったのは後ろ髪を引かれる思い

あの人の後ろ姿を見上げて胸に抱いたのは

湧き上がる切望

そして時は過ぎ

わたし達は最初の一步を踏み出す

魔法少女リリカルなのはStrikers 〵灰より生まれし王〵

はじまります

## 第二話 決意、そして設立（前編）

『 本局の航空魔導師隊の活躍により民間人に死者は出ておりません』

「やっぱりな」

聞こえてきたテレビの報道にひとり愚痴るはやて。  
空港火災の救助要請から一夜明け。  
なのは、フェイト、はやての三人はベットに身を預けていた。

「ううん？」

疑問の声を上げるなのは。  
就寝前ということもあり、シャツ一枚とかなりラフな格好をしている。

枕元ではリインフォースがいびきを立てて爆睡していた。

「実際働いたのは災害担当と初動の陸士部隊と、なのはちゃんとフェイトちゃんやんか」

はやては報道の内容に不満を顕わにする。  
後からやってきた本局の魔導師隊の活躍もあり、火は消し止められた。

だが、この火災で死者が出なかったのは、火災発生当初から尽力した者達の功績でもあるのだ。  
報道の内容に嘘はないが、はやての本意にそぐわないものであった。



「あははは……まあ休暇中だったし」

「民間の人たちは無事だったんだし」

不満を垂れる親友を諭そうとする、なのはとフェイト。  
皆が無事であればいいというのは何とも彼女達らしい考えでもあった。

「せやけど……」

口ごもるはやて。

彼女は彼女で思うことがあるようだ。

「まあまあ、はやてちゃん」

「そういえば、あの魔導師君も救助を手伝いをしてくれたんだよね」

フェイトはモニターを展開する。

そこに移し出されるのは青紫色の髪をした女の子を救助した時に会った少年。

その姿が余ることなくを収められている。

「あれ？ フェイトちゃんのほうは無事だったんやねん」

小首を傾げるはやて。

「うん、この映像はバルディッシュが隔離してくれていたから助かったんだ」

残念そうに首を振るフェイト。

フェイトはこの空港火災の最中に二度、この少年と遭遇している。二度目の遭遇で少年は何らかの手段を使い、バルディッシュの中に残る映像記録を消去したのだ。

「そっか。うちのほうは映像記録はあるんやけど……」

はやては自身が謎の魔導師と遭遇した時の映像を展開する。

「このありさまや」

映像全体に広がる砂嵐。

音声は拾えているものの、映像はまともに見れたものではなかった。

「でも、フェイトちゃんとはやてちゃんは魔導師さん達とお話できたんだよね」

一人、杞憂のなのは。

なのはは声をかけることすら許してもらえなかったのだ。

「話っちゅうかな……」

「こつちの話はほとんど無視されちゃったんだけどね」

言葉の擦れ違い。

それは、魔導師達がフェイト達の話聞く気がなかったからともいえる。

「にやはは、そうなんだ……」

落胆の色を隠せないのは。

もしかしたら、自分を助けてくれた魔導師のことを聞けるかもしれない、思っていただけにショックは大きい。

「なのはちゃんは魔導師さんに助けられたんやよね」

「うん……要救助者の女の子と一緒にね」

なのはが思い出すのは銀色のシールド。

ミッドチルダ式であるそのシールドには、人を魅了させるような綺麗な魔力光。

それでいて、堅牢な硬さを備えた防御壁としての役割を十分に發揮していた。

「助けに行ったのに、逆に助けられて面目ないかな……」

なのは自身が注意を怠った結果、女の子にまで危険が及んでしまった。

もし、魔導師さんに助けてもらえなかったら……。

後悔の念がなのはを蝕む。

「そんなことないよ」

「でも……」

「なのははなのはにできることを精一杯したんだ。それで一人も死者が出ることなく、多くの人が助かったんだ。なのはが気に病むことなんてないはずだよ？」

「フエイトちゃん……！」

生き生きとした表情に戻るなのは。  
その瞳にはすでに失意の色はない。

（対応の遅い地上本部……魔導師達さんが居らんかったら被害が大きくなっとったのは明白や。魔導師さん達みたいに、少数で迅速に事を解決できるエイキスパート達。それが管理局にあらへん。彼女達みたいにうちらも動けたら……）

その一方で、はやては新たな野心を抱き始める。  
動機となったのは心に焼きついた魔導師達の所業。  
意識は記憶の中に沈んでいくのだった。

\* \* \* \*

「あれ、魔導師さん？ あなたは転移しなかったのですか？」

立ち上る炎塵によって、真っ赤に染まった空港。

第三ブロックの上空で待機していたはやてのもとに澄んだ声が届いた。

そして、はやての瞳に映るのは。

（ごつつう美人さんやな）

はやてが魔導師と出会った時の第一感想であった。

手足は細長く、長身でスレンダーな女性。

彼女を覆うグレーのロングコートにはしわひとつとてない。  
コートの袖から垣間見えるのは、まるで硝子を連想させる透き通った柔肌だ。

そして、据えるのは琥珀色の瞳。

精悍な目つきと端正な目鼻立ちは造形美を思わせた。

何と言っても特徴的なのはその雰囲気だろう。

頭の中から爪の先までグレーで統一されたその身立ち。

凜としたたたずまいが、近寄りがたい空気を醸し出していた。

「答えないのならそれもいいでしょう」

魔導師は虚空から魔導書を取り出す。

（何かをしでかすみたいや）

はやては魔導師に杖シュベルトクロイツを向ける。

「ちょい待ちいや。自分はなにもんや？」

「名を聞くときには自分から名乗るのが礼儀ではないでしょうか？」

はやてとの対応を片手間に魔導師は魔導書を開く。  
礼儀のことを言うなら本人も言えたことではない。

「管理局本局特別捜査官の八神はやて一等陸尉です」

律儀にも魔導師に向けて、名乗りを上げるはやて。

「八神さんですか」

「うちは名乗ったで、次は自分の番や」

名乗りを上げたはやてに構わず、魔導師は魔方陣を展開する。

「なにしとんねん!？」

「生憎、いまは名乗る名がないものですから」

空港内からの激しい閃光が迸り、爆風が魔導師を襲う。

灰を落としたような薄暗い色をした黒髪。

それでいて絹糸のように精錬された魔導師の長髪が舞い踊った。

「消火するので、邪魔しなくてももらいましょうか」

「なっ!？」

驚きの声を上げるはやて。

彼女の手足のかかる環状型の魔方陣。

幾重にもめぐらされたバインドがはやてを拘束していた。

（いつの間に……………）

自負しているわけではないが、はやては一流の魔導師である。  
それが簡単に拘束されているのだ。

気づく暇もなく。

（一体、なにもんや）

焦りを募らせるはやて。

一方で、バインドをかけた魔導師は涼しい顔で乱れた髪をおさえていた。

「自分は何をしてるんか分かつとるん!？」

魔導師に向けて必死に声を上げるはやて。

既に魔導師の足元にあるベルカ式の魔方陣は完成されつつあった。

「自分がしとんのは公務執行妨害、並びに指定空域での無許可魔法の使用やで!!」

はやては魔導師の行動が違法行為であることを訴える。  
だが……。

「まずは拘束から抜け出したほうが宜しいのではないのでしょうか？」

魔導師ははやての言い分を歯牙にもかけていない。  
それもそのはず。

はやての肢体にかかるバインドは一向に外れる気配がないのだ。

「くっ!」

はやては歯を噛む。

幾重にもかけられたバインド。

ミッドとベルカの混成でありながら、驚くほど緻密に強固に編み上げである。

正攻法で解除していたら、どれほど時間が掛かるか分かったものではない。

「砕け バインドブレイク!!」

はやては両手両足に魔法陣を展開する。  
展開された魔法陣が内側からバインドを破壊する。  
はずだったのだが……。

「うそやっ!」

目の前で起こった結果。

はやてはその結果に驚嘆する。

バインドはひび一つはいることなく、びくともしなかったのだ。

「そんな簡単には解けませんよ」

術者は語る。

「特製のバインドですから」

その程度で壊れることはない。

「もう一度聞く、自分はなにもんや?」

返ってくる答えは分かりきっている。

しかし、はやてはそう問わずにはいらなかった。

「先ほどもお答えしたはずなのですが……」

魔導師は嘆息する。

まさか、同じことを再度聞かれるとは思ってもいなかったのだろ  
う。



「まあ……」

魔導師はくすりと微笑む。

「もう一度会いまみえたときには必ずお答えしましょう」

（反則や……）

凜として人を近づけない雰囲気のある魔導師。  
その魔導師が初めて見せた女性らしい華やかな笑顔。  
はやては美麗な笑顔に魅せられてしまっていた。

「そろそろ始まりますよ」

「へ？」

魔導師の顔に見入ってしまったのはやて。  
突然、言葉を掛けられたことで声が裏返ってしまった。

「特等席にいるのですから、見ていて損はないでしょう」

魔導師は空港を見るように促す。  
そこにあつたのは。

「なっ……!!」

辺りを照らす銀の光。

空港を囲むほど大きな正三角形の魔方陣。

魔法陣の中央では剣十字の紋章が回転していた。

「自分らは何をするつもりや!!」

「いいから黙ってみてなさい」

「うう」

魔導師にびしゃりと言いつけられ唸るはやて。

いまから行われるであろう凶行を止めようにも、バインドに拘束されたままでは文字通り手も足も出ない。

「始まりましたよ」

魔導師が開始を告げる。

魔法陣から眩いほどの銀の光が放たれる。

そこで空港全体に変化が現れた。

炎が逆巻き真っ赤に染まっていた空港が凍りつき始めたのだ。

「順調ね」

白い吐息。

はやて達の周りにも冷気が漂ってきていた。

凍結魔法の余波が来たのだ。

そんな中、魔導師は眉をひそめた。

「二射目が遅いですね」

何か手違いがあったようだ。

「あ、あのっ！」

恐る恐る尋ねるはやて。

まだ十代半ばの少女。

怒られて縮こまるのは当然ともいえる。

「一体、あなた達の目的は何なんや？」

改めて考え直してみた結果、はやてはこの魔導師が悪い人には見えなかった。

先ほどの救助活動。

空港内にいた人を転送し、はやてを拘束したのは邪魔にならないように。

そして、いま行っている消火活動。

よく考えれば辻褄が合うのだ。

ただ、そうなれば目的が分からない。

魔導師が管理局員もどきの行為を行っている理由が……。

「目的でしょうか……………」

魔導師は、はやての問いに少し考えたのち。

「分かりました、教えましょう。先ほど名乗って頂いたお返しもしてませんか」

たたずまいを直す魔導師。

はやても息を呑み、答えを待つ。

「この事態を防ぐことができなかった罪滅ぼし、と言ったところで

す」

「なんやて……!?!」

予想外な答えに動揺するはやて。

「さて、こちら辺で問答は終わりです」

「ちょい待ちいな!!」

はやては真相を聞こうと制止を試みる。

だが、はやてのことを無視して魔導師は空港に向けて手を掲げた。仕方なく、はやても空港に目を向けることにした。

「っ!」

眼下に広がる光景。

移り変わった空港の様子に、はやては目を見張る。

おそらく問答をしていた間であろう。

空港には小さな氷山があちらこちらに出来上がっていたのだ。それでも、まだ火は完全に消えていない。

「天よりの恵み途絶えて

」

「……………」

空港内で燦っている炎に向けて魔導師は凍結魔法を放つ。

それも詠唱中にだ。

てつきり儀式魔法の一種だと思っていたはやては、絶句で物が言

いえなくなる。

ベルカ式魔法陣から放たれた凍結魔法は空に灰色の軌跡を描いていき、分散する。

そして、飢えた獣が餌を求めるみたく、炎に向け疾駆していく。

「解き放たるは餓える獣」

疾駆していた魔法弾が炎を飲みこみ。

白銀の閃光が空港を覆いつくしたのだった。

## 第二話 決意、そして設立（前編）（後書き）

今回は長々となったので前編と後編に分けさせていただきました。

更新遅れの申し開きをするとしたらこれが原因です。  
文章が短くまとまりません or z

さて、後編は日曜更新します。

今度こそ絶対に更新して見せます！！

それではまた！

## 第二話 決意、そして設立（後編）（前書き）

初めての予約投投稿。

うまくいったでしょうか？  
心配です。

成功したことを信じて。  
それでは、後編の始まりです。

## 第二話 決意、そして設立（後編）

魔導師が一撃を加えたその結果。

凍てつくような冷気が空港を。

莫大な氷霧がはやて達の視界を支配する。

「……………」

もはや、はやてに語ることはあるまい。

視界を覆っていた濃い氷霧が晴れていくと。

そこには静寂に包まれた空港が残るだけであつた。

炎が燦っていた場所には巨大な氷の造花が咲いているのは愛嬌か。

「終わったでしょうか？」

「自分が終わらせたんやろ！！」

魔導師の呟き。

その呟きに透かさずつつこみを入れるはやて。

魔導師が続ける奇行に、とうとう堪えきれなくなったのだ。

「まだだつたみたいですねっ」

またしてもはやての言うことを無視。

魔導師は一足で、はやてとの距離を詰めてきた。

「失礼しますね」



「な、何してん」

返事を聞くことなくはやてを抱き寄せる魔導師。  
何を思ったか、はやてを抱き寄せるとすぐさまシールドを張ったのだ。

「衝撃に備えてくださいね」

回された手は強くはやてを抱き寄せていた。  
それがはやてにただならぬ事態が起きているのだと理解させてくれた。

はやては言われた通り、身を屈め衝撃に備える。

「つつつ!!」

目を瞑りたくなるような閃光。  
耳を塞ぐ轟音。

はやての手に自然と力がこもる。

しばらくして。

「やはり、もう一つありましたか」

真っ赤に染まる空港を見て、魔導師が憎々しげに独り言を口にする。

「どついつことや」

聞き咎めるはやて。  
魔導師を視線で射止める。

その格好は身長差もあり、自然と上目遣いになった。

そんな、はやてに魔導師は凜とした声音で告げる。

「まずはその手を放してください」

魔導師が指摘するのは己を引っ張るか細い手。

はやては知らず知らずの内に魔導師のコートをぎゅっと強く握っていた。

「っ!？」

はやては慌てて手を放そうとするがそこであることに気付く。

（バインドがあらへん？）

そう、はやての腕にかかっていたはずのバインドが軒並み無くなっていたのだ。

足のほうにかかっているのはそのままであるが。

（もしかして……魔導師さん……）

先ほどの爆発の時。

はやてが怪我をしないように最低限のバインドを除いて解除したのだろう。

意外と優しい性格なのかもしれない。

「話してからや」

はやてはニヤリと笑みを浮かべる。

圧倒的の状況が不利ないま、心は痛むがこれを利用しない手はなかった。

「バインドの数を倍にしますよ」

「それでもや」

はやては決して譲らない。

このときを除けば話を聞く機会がなくなってしまう恐れがあったからだ。

「駄々っ子みたいな真似をしないでください」

「なんとでも言うがええねん」

余裕の表情を浮かべるはやて。

対して、魔導師は精神的に追い詰められていくようだった。

「早くその手を放しなさい、子狸さん」

「こ、子狸はあらへんよ！！」

だが、この魔導師。

追いつめられてなお、体を崩すことはなかった。

それに加え、反撃とばかりに放つ的を射た一言が見事にはやての心を打ち抜く。

「うち、めっちゃ傷ついたで」

魔導師が放った一言に崩れ落ちるはやて。

子狸。

何故かここ最近になって、管理局内で密かに囁かれるようになって、はやての仇名である。

「ほんと、傷ついたで」

はやては瞳を潤ませて魔導師に迫る。

「失言があつたようですね。そのことについては謝りましょう」

詫びを入れる魔導師。

しかしながら、その態度はともではないが謝っているように見えなかった。

「話してはくれへん？」

「こちらの事情もあるので、それは無理ですね」

はやてはここぞと言わんばかりに涙目のまま攻め寄る。  
対して、魔導師の答えは変わらない。

「その事情を聞かせてくれへん？」

「無理ですね」

平行線をたどる話し合い。

「そっか……」

顔を俯かせるはやて。

魔導師はその態度に眉をひそめた。

「なら仕方あらへん」

顔を上げるはやて。

そこにはニンマリとした笑みが浮かんでいた。

「無理やりにも」

はやての両足を拘束していたバインドが砕け散る。

これで、はやてを拘束するものは何もなくなくなったのだ。

魔導師は咄嗟に距離を取ろうとする。

「聞かせてもらっで！！」

杖を構え直すはやて。

バインドが魔導師に襲いかかっていく。

（どうやー！！）

完全に不意を突いた攻撃。

それでも、はやての意識は酷く張っていた。

先ほどから見せられている実力差。

暗に魔導師が逮捕をあきらめるとほのめかしているようなものだった。

その予測を裏切ることなく、魔導師は綺麗な体さばきでバインドから抜け出し。

されど、魔導師の不意を突いたのは大きかったのか。

魔導師の左足がバインドに捕まる。

今のはやてにとつてはこれだけでも僥倖であつた。

「刃を以て、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー」

数十本もの短剣が魔導師を取り囲む。

「悪いことはいわへん。素直に両手を上げいや」

投降を促すはやて。

それを聞いた魔導師はびくともしていない。

はやてが放った短剣に囲まれているにもかかわらずだ。  
むしろ、その様子を目にしたはやての方が気圧されつつあつた。

「わたしを捕まえる前にやるべきことはありませんか？」

魔導師は炎の勢いが、ぶり返しつつある空港に目をやる。

つられてはやてもそちらに目を移した。

（魔導師さんが言いたいことは分かるんや。でもな……）

なにも凍結魔法が使えるのは魔導師だけではない。

広域攻撃魔法。

これがはやての得意とする分野である。

「魔導師さんを捕まえた後で、きつちり」

「甘いですね」

{Explosion・Schlssel Befreiung}

「なっ!?!」

目を戻した先。

そこにいたのは左手に新たなデバイスを携えた魔導師。

剣状のデバイスから薬莢が排出されると魔導師が動いた。

一閃。

魔導師は優美に剣を薙いだ。

たったその一撃。

その一薙ぎによって、魔導師を取り囲んでいた短剣が打ち砕かれる。

「っ!」

魔導師は止まらない。

右手の魔導書を空に放り、流れる動作で疾駆する。

いつの間にか左足を拘束していたバインドは消え去っており、驚きを隠せないでいるはやての懷に魔導師は踏み込んだ。

hSchwarze Wirkung

「くうっ!」

苦悶を上げるはやて。

咄嗟に張ったシールドと灰色の魔力を纏った魔導師の拳がぶつかる。

二色の魔力がせめぎ合った結果。

（仕舞うたっ！？）

シールドはいとも簡単に破られ、はやて自身も大きく体制を崩す。明らかな隙。

追い打ちは防ぎようがない。

はやてが目を閉じる前。

覚悟の前に見たのは魔導師の脇で煌めく剣光。

それは魔導師が構える剣から放たれる禍々しい鈍色の光沢であった。

「あれっ？」

来る筈の衝撃。

訪れるはずの痛み。

はやてが予期した苦痛が襲ってこない。

状況を確認するべく、はやては恐る恐る薄目を開けた。

「あうっ！」

不意打ちに声を上げるはやて。

頭部に奔る小さな痛み。

薄目を開けたはやてに待っていたのは所謂デコピンである。

「おいたは程々にしてくださいね」

はやてを呆れ顔で見下ろしてくる魔導師。

空に魔法陣を描くと再びはやてを拘束する。



「卑怯やで!!」

肢体にバインドを掛けられたはやてが喚き声をあげる。

「巧みな話術を使い、人を騙そうとしたお嬢さんが言えることでしょうか？」

「うう」

「今度こそじつとしておいてください」

唸るはやてをしり目に魔導師は宙に浮かぶ魔導書を回収する。  
そのままはやてを放置し、魔導師は詠唱を唱えていた場所まで戻っていった。

「これはやり過ぎやで……」

放置されたはやては自身を縛るバインドを調べて呻く。  
バインドの数が3倍にも、4倍にも増やされているのだ。

「魔導師さんはいったい何者や？」

何度も口にしたその言葉。

はやての疑問は尽きることない。

「まあええ。今はうちにできることをしようか」

はやては見据えた。

ベル力式の魔方阵を展開する彼女の姿を。

（目に焼き付けといたる）

輝く銀光。

放たれる強大な魔力。

空港の向こう端から二筋の光が伸びる。

一つは魔導師の展開する魔方阵へと。

（せやから……）

そして、もう一つの光線が伸びていった場所。

銀の魔力を放つ魔導師とはやての目の前にいる彼女とを結ぶ対角に当たる位置。

そこから先ほどと同じように、今度は漆黒の光線が伸びていく。

一つは魔導師。

一つは銀の魔方阵を展開した魔導師へと。

（次、会ったときは　　）

そして最後、はやての見据える魔導師。

彼女の足元から灰色の光線が他の二人に伸びていく。

その三つの魔力光があたかも当然のように絡みついた。

「黄昏の時へと刻み続けよ」

魔導師の詠唱が終わり。

詠唱を完了させた魔導師達三人、それぞれを頂点とする正三角形の魔方阵が夜空を彩った。

（　　色々聞かせてもらうでー！！）

はやての固い決意。

それとは対照的に、魔導師は静かに終わりを告げる。

「訪れよ 大いなる冬 フィンブルヴェト」

空を覆う広大な魔法陣から放たれた凍結魔法に空間が悲鳴を上げるのだった。

\* \* \* \*

そして、はやての意識はベットの上へと舞い戻る。

（えらいことをしよったな、魔導師さん達……）

いまでも脳裏に焼け付くその光景。

最後の魔法の威力には、はやても度肝を抜かれた。

空港だけでなく、空間そのものを凍結させた巨大魔法。

まさに広域殲滅用の魔法といった感じであった。

それよりも 。

（でたらめなことをしよったな）

はやてが特筆したいのは空に描かれた特大の魔方陣の方だ。

複数の魔術師がそれぞれの魔方陣を用いて一つの魔法を完成、維

持させることはある。

特に結界魔法がよい例だ。

だが、魔導師達がやったのはそんな生易しいものではなかった。個々の魔導師資質が異なる為、魔導師がそれぞれの魔力を共有しあい、一つの魔方陣を構成するのは不可能と言える。

できても、魔力同士の衝突や綻びによって魔方陣は消滅してしまう。

例外としてユニゾンデバイスがあるものの、魔導師達はそのようなものを使わずに常識をいとも簡単に打ち破ったのだ。

はやてはその異常ともいえる魔導師達の練度、そして一人一人がお互いに信用できる、その絆に心を奪われていた。

（やっぱり　　）

はやての中で膨れ上がる思い。

（うちも……うちの部隊を持ちたい！！）

空で出会った魔導師。

そして、見せつけられた所業。

形は違えど模範となりうる彼女たちの行動を見て、はやての心は強い切望でいっぱいになる。

災害救助に犯罪対策。

さらにはロストログアの対策まで。

多種多様な事件にいち早く対応できる、少数先鋭のエキスパート部隊。

今の管理局では難しいのが現状。

だが、これがはやての思い描いた構想であった。

「あのなあ……なのはちゃん、フェイトちゃん」

「「うん？」」

親友の二人を目の前に佇まいを居直すはやて。  
彼女は重い口を開く。

「わたし……やっぱ自分の部隊を持ちたいんよ！」

話し始めるのは描いた未来図。

なのはもフェイトも協力を当然のように受け入れた。

そして、少女達は夢に向かって奔走を始める。

#### 四年後

「このお部屋もやっと隊長室らしくなっただすね」

「そやね。ラインのデスクも、ちょうどええのが見つかったよかつたな」

体全体を使い、喜びを顕わにする小人の妖精ライン。

それに優しく微笑むはやて。

四年もの月日経ち、若干ながら大人びている。

「えへへ。ラインにぴったりサイズです」

鳴り響く機械音。

誰かが部隊長室に訪れたことを知らせる。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

「お着替え終了やね」

入室するのは、六課の制服に着替えた、なのはとフェイトである。  
はやて同様、四年前に比べ少し大人びている。

「お二人とも素敵です」

「にはは」

「ありがとう、ライン」

制服を見て、会話が弾む少女達。

「さて、それでは」

「うん」

なのはとフェイトは踵を鳴らし、敬礼する。

「本日只今より高町なのは一等空尉」

「フェイト・テストロッサ・ハラOWN執務官」

「両名とも、機動六課に出向となります」

「どうぞよろしくお願いします」

「はい。よろしくお願いします」

幼馴染の三人は出向のあいさつを終える。

「ふふふふ」

「ふふ」

部長長室には和気藹々とした空気が流れ。  
そして。

「機動六課設立や」

はやては告げる。

思い描いた夢の舞台の始まりを。

それぞれの希望を胸に。

踏み出した一步を。





## 第二話 決意、そして設立（後編）（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

さて、作中で魔導師が発動した魔法なのですが……  
ドイツ語で『解放の鍵』の意を持たせたつもりです。

『Befreiung schlussel』

これに迂言法を用いて、

『schlussel Befreiung』

と表記させていただきました。

作者はドイツ語を齧った程度なので、間違えがあるかもしれませんが  
ん。

その時は指摘お願いします。

???「俺の出番が一欠けらもない」

作者「ちよつと!!　　そう言うネタバレ発言は止めてください!!」

???「作者!　　お前は俺の扱いが不当だと思わないのか?」

作者「我慢です!　　我慢!!」

「……待て。この不当な扱いを続けているのはお前ではないか？」

作者「ぎくっ!!」

「アイ、セットアップ」

「了解です、主」

作者「ま、待って」

— — — — —

「……終わったな」

「そうですね」

作者「……うう」

「……まだ生きていたか」

「アイ、ゴキブリ並みにしぶといようです」

作者「次はあなたの出番がありますから」

「……うむ」

アイハ主は寛大ですね

作者「どこですか!？」

アイハ次こそ主が

???ハ羊の皮を脱ぎ捨てる

???「黙れ、オウル」

オウルハ相変わらず、「冗談が聞かねえ……」

## 次回予告

初めての出勤、初めての実戦

胸の奥の小さな不安

かき消すように届いたのは強く、優しい声

そして、現れるは謎の魔導師

魔法少女リリカルなのはStrikers  
く灰より生まれし王

## 第三話 『管理局の幽霊』

テイク・オフ

**EP: 2 / 50 (前書き)**

予定外の更新です。

第二話と第三話の間のショートストーリーをお送りします。

本来、人が立ち入ることのない空間。  
その暗がりでは男は待機していた。

「調子はどうだ？」

「順風満帆です」

「警備システムの詳細図を廻せ」

「了解です」

念通に答えるのは少年の声。  
低く鋭い男の声に比べると、まだ変声期の迎えていないだろうその声は高くあどけなさが漂う。

「アイ、送るよ」

「（受諾しました）」

念通に加わる女性の声。

男の手元でアイと呼ばれたデバイスが光る。

「（なかなかのものだな）」

「（同意します）」

廻されてきた詳細図を見て男は唸る。

目的のものを守る機械群。  
センサーに強化ガラス等どれも一級品である。

「ほう……」

念通を忘れ、感嘆の声を漏らす男。

画面をスクロールさせる手を止め、暫し画面と睨み合った。

「（いかがされましたか主？）」

「（これを見ても）」

「（これは！？）」

画面に映し出されているのは耐侵入者用の迎撃装置。  
彼らも侵入する上で迎撃装置が守護しているのは予想できた。  
だが、目の前にあるそれには一つ問題があった。

「（質量兵器の样ですね）」

「（ああ）」

質量兵器。

目下、管理局が管理する世界では使用が禁止されている代物である。

「（ビンゴだ）」

この建物に入ってから目にする固執した警備体制。  
配備された質量兵器。

彼らの探し物、氷界のクリスタル　がここにあるのは間違えなかった。

「（何の為に僕がクラッキングしていると思っっているんですか？）」

念通の向こうで少年が口を尖らせる。

「（別にお前がクラックしているわけではないだろ？）」

「（ぼ・く・が、やっているんです！！）」

「（アルクはいつの間に嘘つきになっちゃったのかな？　ソフィー、悲しいよ）」

また新たな声が念通に参加する。

「（失礼な！　空言を言わないでほしい！）」

「（仕事の割合はソフィーが八割で、アルクが二割だよ）」

「（アルクはソフィーに頼り過ぎだぞ）」

「（くっ！）」

鋭い男の声とソフィーという名の可愛い少女の声に寤められる少年アルク。

「（それでお前達はいつまで俺をこんなところに閉じ込めておくつもりだ？）」

「（あと五分！ いえ、あと三分！ 速戦即決でやって見せます！）」

「（こっちはもう終わったよ。あとはアルクだけのただだよ）」

「（ソフィー手伝って！ 暗号が解けないんだ！！）」

「（こんなんちよちいのちよい）」

「（何でこんな早く！？ ……っ！ さては謀ったなソフィー！！）」

「（しーらない）」

ただ漏れの念通に男は苦笑する。  
ソフィーがいるといつもこうなる。

大事な作戦を目の前に、この緊張感のなさは相変わらずなのだ。

「（どうにかありませんかね）」

「（全くだ）」

男は相手の意見に賛成する。

緊張しすぎて体が動かないのは話にならないが、逆に緊張感が欠けているのも危ない。

「（真面目にしろ、ソフィー）」

故に男はアルクの仕事を邪魔していることであろう、ソフィーに一喝を入れる。



「（む、ソフィーは自分の仕事を終えてるのに何で怒られないといけないのよ！）」

「（ソフィーがアルクの邪魔をしているからだ）」

ソフィーは抗議の声を上げるが、男はそれを許さない。

「（レオのいけず）」

「（帰ったらメンテナンスしてやるから、アルクを手伝え）」

「（しょうがないな）」

「（頼んだよ）」

途切れる念通。

それに胸を撫で下ろす男レオ。

ソフィーがアルクの手伝いをするのならこの仕事はもはや終わったようなものだった。

「（私のメンテナンスもお願いできるでしょうか？）」

「（ついでだから問題ない）」

「（感謝します、主）」

アイの申し出をレオは快く引き受ける。

「（なら、俺も頼むぜ）」

レオの左手に握られているデバイスのコアが光り、念通を届ける。

「（お前のは却下だ）」

透かさずレオはデバイスの発言を切り捨てる。

「（待つて！ 俺が一番、酷使されてんだぞ！！）」

デバイスは不当な扱いを受けていると抗議する。

現にレオの居場所が分からないように魔法のコントロールを行っているのだ。

それも複数の魔法を重ね掛けで。

「（便利だからな）」

「（それなら少しは労わってくれ！！）」

抗議の声を強くするデバイス。  
話だけ聞くと彼だけ哀れである。

「（十分、労わっているだろ？）」

「（どの口で言いやがる）」

「（この口だが？）」

「（分かった、分かったさ。旦那がそんな態度を取るなら今すぐ魔法を解除してやる！！）」

レオの態度にデバイスが口火を切った。

「（そんなことをすれば、どうなるか分かっているのだろうな）」

冷やかな目で見下げるレオ。

彼は己のデバイスの反抗を許さない。

「（じよ、冗談だ。ス、スクラップだけは勘弁してくれ!）」

「（この世には言っても良い冗談と悪い冗談があるのを知らなかったのか?）」

「（す、すいませんでした!!）」

デバイスは神速に頭を下げる。

実際はただコアが光っているだけであるが。

「（謝るぐらいなら初めから言わなければいいのではないですか?）」

いままで主とデバイスの口論を傍観していたアイが口を開く。

「（腰巾着は黙っててくれ）」

「（ずいぶんな物言いですね、オウル）」

睨み合う二機のデバイス。

右手のデバイス・アイと左手のデバイス・オウル。  
主であるレオを挟んで静かに火花を散らし続ける。

「（前々から言おうと思っていたのですが、あなたは主に対する態度がなっていない！）」

「（俺が旦那にどんな態度を取ろうと勝手だろ）」

「（言葉遣いといい、心遣いといい……あなたはマスターに敬意を払うべきです！！）」

「（旦那は旦那だ。これが俺なりの敬意だ）」

「（あなたという人は……！！）」

次第に口論はエスカレートしていく。

デバイス達の口論なのでコアの輝きが増すだけなのだが。

「（そこまでだ、お前達）」

レオは仕方なく仲裁に入る。

普段なら放っておいてもいいが、いまは任務中である。

「（主が仰るなら……）」

「（旦那が言うなら仕方ねえな）」

マスターであるレオの言葉に引き下がる二機のデバイス達。

「（アルクにソフィー。盗み聞きはいいが、準備は終わったのだろ  
うな？）」

そして、目の前の喧噪が終わったことで、彼の意識は姿の見えな

仲間たちに向けられる。

「（準備万端。いつでも行けますよ）」

「（システムダウンから奴らが気づくまで五分は掛かるよ）」

「（上出来だ）」

およそ一分でレオは 氷界のクリスタル を手に入れるつもりだったのだ。

五分もあれば脱出までの時間を入れてもたんまりとおつりが返ってくる。

「（これよりカウント30で突入を開始する）」

「「「（了解！！）」」」

EP: 2 / 50 (後書き)

いかがでしたか？

今回の話で主人公達の名前だけ明かされました。

主人公：レオ

レオのデバイス：アイ、オウル

協力者：アルク

アルクのデバイス：ソフィー

と言ったところでしょうか。

これからゆっくりと彼らのことを紐解いていくつもりなのです。

また、日曜日にお会いしましょう。

では！！

### 第三話 管理局の幽霊（前編）（前書き）

早めの更新です。

今回も新キャラ登場！？

次々と出してすみません m ( \_ ) m

それでは！

Take 1

多忙な日々

言い渡される新たな任務

そこには大量の機械兵がいて

未来を担う少女達が奮闘していた

そして、よく顔を知る人物も

やはり今日は厄日か

作者「カアアアアアットオオ」

レオ「俺は心の赴くまま言い切ったぞ」

アイ「主のアドリブを邪魔しないでもらいたいですね」

作者「いや、台本道理に読んでくださいよ（涙）」

レオ「仕方ないか」

アイ「主が仰るなら」

作者「まさかのtake2です。どうぞ」

## Take 2

潜入捜査の帰り道

言い渡される新たな任務

そこには大量の機械兵がいて

未来を担う少女達が奮闘していた

そして、戦いの場へと

幽霊は静かに舞い降りる

魔法少女リリカルなのはStrikers へ灰より生まれし王へ

はじまります



### 第三話 管理局の幽霊（前編）

Side レオ

空を見上げると突き刺すように降り注ぐ朝日。

俺は通勤ラッシュで賑わう大通りを一人歩いていた。

服装は一般的な黒いスーツ。

もちろん執務官が着るような徽章の数々はついていない。

潜入捜査の時まで目立つ管理局の制服を着る馬鹿は少ないであろう。

三日間の潜入調査とそれを元に行われたロストログアの押収劇はあっさりと幕を閉じた。

手元にある 氷界のクリスタル が何よりの証拠だ。

保管されているケースから取り出した時に、封印が掛かってないことには驚いたが。

驚いたというのは奴らもだろうな。

せっかく密輸して、厳重に保管していたものが盗まれたのだ。跡形もなくて。

いや、跡形もなくというのは語弊があるだろう。

壊された質量兵器、無くなったロストログア。

これ以上の痕跡を俺達は残していない。

足がつくこともないだろう。

さて、報告はどしたのか。

質量兵器にロストログアと一管理局員として見逃せるものではない。

い。

だが、自分が再び出向くのは面倒だ。  
極秘に押収せずに部隊を率いて押収に行くべきだったか。  
そうすると氷界こいつのクリスタルは手に入らなかっただろうが……。

まあ、いつも通り報告するか。

あの部隊長がどうにかしてくれる。

遣わされた部隊の方々はご愁傷様だ。

バックにある某大手企業と遣り合うことになるだろう。

となると、明日は久しぶりの休みか。

その前にソフィー達のメンテナンスがあつたな。

まだ、一日は終わりそうになかった。

「通信です、主」

「誰からだ？」

少なくとも同じ部隊の人間ではないと思う。

人が単独で潜入捜査に当たっているのが分かっていて通信を入れてくるのは……二人いたな。

非常識な奴らが同じ部隊で二人。

「エイリスからです」

アイが出した名前に俺は顔をしかめる。

エイリス。

本名はグレイ・エイリス。

所属している部隊が違うにもかかわらず、面倒な仕事押しつけてくる厄介な奴。

俺にとっての危険人物トップ3に入る人物だ。

「少し待てと伝えておけ」

大通りを逸れ、小道に人の気配が少ない方へと進んでいく。

「起きろ、オウル」

「かあちゃん……まだ眠いよ………」

人氣がほとんどなくなったところでオウルを叩き起こす。  
何やら寢言を言っているがいつものことだ。

「仕事だ、早くしろ」

「結界を張ればいいのか？」

「ああ」

オウルは無駄口こそ多いが、なかなか良いデバイスである。  
特に演算では重宝するのだ。

「お休み。昼過ぎまで起こさないで」

「勝手にしろ」

こいつは仕事をやったのだ。  
いまは十分寝かせてやろう。

「アイ、回線を」

「了解しました」

こちらの意を汲んでくれるもう一機のデバイス、アイ。普段はオウルの軽口に突っ掛るのだが、いまはそうしない。アイもこの度の潜入捜査でオウルが頑張ったことを認めているのだ。

「相変わらず人を待たせるが好きなようですね」

匿秘回線から聞こえてくるのは凜とした声。お互い傍受の危険を考慮して映像回線は切つてある。

「世話がしたいなら使い魔とでもしている」

「連れない男になってしまったようで」

「はあ、御託はいいから用事はなんだ？」

本当、世話をしたいのなら使い魔とでもしていてくれ。こちらは任務の最中。

ロストロギアの護送を行っているのだ。

「あなたにやつてもらいたい仕事の一つ」

「却下だ。第一、いま任務中だ」

何度も言うが只今、ロストロギアの護衛中。他の任務など受けている暇はない。

『あなたなら問題ないでしょ』

「問題あ

」

『現在、密輸ルートで運ばれた第一級搜索指定ロストログァ・レツリク。これが山岳部を走るリニアレールで輸送されるのこと。あなたには馴染みの深いものだから分かるでしょう』

「……………」

エリスは俺の話を聞くつもりは無いようだ。  
相変わらずなのはどっちだ。  
グレイ・エリス  
第二の暴君め。

「それで、レリックをお持ち帰り押収すればいいのか？」

俺が出向くことが決定事項のようなので任務の内容を聞いておく。

『いえ。レリックを専門に扱っている部隊がいるようなので、基本的にそちらに任せたいと思います』

レリックを専門に扱っている部隊。

聞いてことは……………あるな。

なんでも地上に新設された妙な部隊だとか。

「俺が出向く必要性が見当たらないな」

なら、その部隊の連中にレリックを任せればいいはずだ。  
任務中の俺がやることではない。

『保険の為ですよ。彼女達が失敗した時は、あなたに回収を行って  
もらうつもりです』

「機動課の部隊が失敗するようなことは滅多にないだろう」

『そうですね』

機動課とは本局のエキスパートが集まる部隊。

そのエリートさん達がたかがレリック一つの押収に失敗するとは思えない。

失敗するとしたらレリックが爆発するぐらいしか思いつかない。

待てよ。

エリスは尻拭いをしろと言っていたな。

爆発したレリックをどうしろって言っただ。

高エネルギー結晶体の再構築なんてどこの魔導師を探しても無理だぞ。

「まさか、レリックを創れとか言っただよ」

『言っわけないでしょ。わたしをなんだと思っているのですか？』

だとすれば、失敗の要因はなんだ。

「差し出がましいことを言うようですが、エリスはガジェットドローン  
を危険視しているのではないのでしょうか？」

『流石、鋭いですね』

ガジェットドローン。

ここ数年で活動を活発化させているロストログア回収用の機械兵。この機械兵は小型の質量兵器に加え、アンチ・マギリンク・フィールドなどという小生意気な武装を持っているのだ。確か製作者は。

「ジェイル・スカリエッティか」

『「明察」』

稀代の天才科学者ジェイル・スカリエッティ。数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者でもある。スカリエッティが出てくるのなら、おそらくあいつらも来るか。

『でもダメでしょう。まだ公開されている情報でないのですから、簡単に口にしては』

「了解だ」

スカリエッティがガジェットのプロデューサーと突き止めたのはここ最近のこと。

故に知る者だけが知る極秘情報である。

「俺が出る理由が分かったが、他にやることは？」

どうせ無理難題の一つや二つを押し付けてくるのは分かりきっている。

ならば、早めに聞いておいた方が気が楽だ。

『彼らの戦力把握をお願いします』

是非とも断りたい。

初見の相手に手合せもせず、に力量を測れと。はつきり言ってしまうは無理だ。

それにどちらも全戦力でことに当たるわけではないはずだ。

「どちらの戦力をどうやって測ればいい？」

『スカリエッティの方は全力投入は無さそうですから、機動六課の戦力把握をできるだけお願いします』

表面上、目標が二つから一つに変わったように見える。

しかしながら、その内情は変わったわけではない。

ガジェットの方は敵対した機動課から各部署に報告書が行き届くだろう。

新型が出てくれば別問題だが。

『方法はあなたのご慧眼を頼りにしていますよ』

困ったな。

結局、俺任せである。

「期待に添えるか心配でならない」

『ご謙遜を』

聞こえるのは微かな笑い声。

『それではご健闘を祈ります』

エリスは仕事を押し付けると通信回線を切ったようだ。



「アイ、資料を」

「今直ぐに」

求めるのは機動課の資料。

確か……機動六課とか言ったな。

機動六課？

最近どこかでその名前を聞いたような……。

「八神の部隊か」

ウィンドーを切り替えていくと、映ったのは茶色髪をショートカットにした可愛い少女。

八神はやて二等陸佐。

若干19歳で二佐の地位まで上り詰め、所持するのは魔導師ランク総合SSに強固な固有戦力、謎の多い希少スキルだったか。

八神が二佐まで上り詰めているのが驚きだ。

この前会った時は確か三佐だったはずだぞ。

「部隊員の名簿は？」

「こちらに」

すぐさま新たなウィンドーを展開するアイ。  
少し待て。

俺はあることに気付く。

「アイ、お前は準備が良過ぎないか？」

「主のデバイスとして当然です」

「そうか……」

納得できる理由ではないが納得するしかない。

つくづくと思うが俺の相方は癖が多いが優秀な奴らだ。

それにしても管理局のセキュリティーはずさんである。

一介のデバイスが端末なしにアクセスして、苦なくして部隊の構成員……つまり個人情報を引き出せるのだからな。

「まあ、この情報は元々、私が持っていたものなのですが……」

「聞いてないぞ」

アイの言っていることが本当ならば、評価を変えなくてはならない。

「元を辿れば主に非があるのですよ」

「俺が何をした？」

「私ははやて様からの御誘いを断る必要がなかったと思っておりません」

「蒸し返すな」

八神から新部隊に来ないかと誘われたのは事実だ。

その時は顔も合わせずに返してしまっただ。

大隊の隊長補佐を引き抜こうと思う気がしなかったからだ。

なににせよ、全ては過ぎ去ったことだ。

蒸し返す必要はない。

「はやく様からはいつでも」

「アイ」

アイの発言を制止させる。

これ以上の問答は不要であるから。

「申し訳ありません。おこがましいことを言ってしまいました」

別に謝られることでもないのだが。

そう言ってしまうと、話を戻されるので止めておく。

「旦那、メールが来てるぞ」

「アルクからか」

どうせあいつも使いに出されたのだろう。

エリスに。

その前にオウル、お前は寝ているんじゃないのか。

「それで合流場所は？」

「無し。そのまま現場に向かうのださ」

「了解」

合流の機会が減るに越したことはないが、その分、人目に付きにくくなるからな。

「で、旦那はこの仕事を受けるのか？」

「愚問だな」

いまさら断れるはずもない。

依頼者はあのエリスからだからな。

それよりも。

「腹が減った。どこかに寄っていくぞ」

「旦那、こういうときは腹の虫を鳴らしてアピールするもんだろ？」

「主はそのような下賤なまねをしません」

騒ぎ立てる相方達とともに歩を進めるのだった。

Side out

\* \* \* \*

グラナガンの首都道路を駆ける黒いスポーツカー。

はやてを聖王教会に送り届けたフェイトは地上本部へと向かって  
いた。

「サー、カミラ少将から通信です」

「少将から？ 繋いで」

通信が入ってきたことを告げるバルディッシュ。

フェイトは今から会う予定の人物から、通信が入ったことを不思議に思う。

『お久しぶりね、フェイトさん』

モニターに映るのはヒヤシンスのような淡い青の長髪に碧眼の若い女性。

レジアス・ゲイツと並ぶ、地上の重鎮の一人である。

「お久しぶりです」

フェイトはおずおずと頭を下げる。

カミラは地上勤めとはいえ、長年管理局の法に携わってきた凄腕の執務官。

つまり、フェイトの先輩にあたる人物である。

『あんまりよそ見していると危ないわよ』

「カミラがつ……！」

自ら通信を入れておいて、運転中のフェイトに注意を促すカミラ。フェイトが文句を言おうとしたとき、一台の黄色いスポーツカーが無理やり追い越してきた。

明らかなスピード違反、明らかな危険運転である。

「待ちなさいっ……！」

犯人を追うために魔法で赤色灯を出現させようとするフェイト。

『追わなくても大丈夫よ』

「見過ごすわけにはいきません！」

『大丈夫』

フェイトの行動はカミラに言いとめられる。

しかしながら、フェイトの性格から言っただとえ小さな犯罪であったとしても見逃せるはずがない。

『ほらね』

カミラがフェイトを制止して数秒足らず。

黄色いスポーツカーはサイレンを鳴らしたバイクに捕まっていた。

『さてと、本題に入りましょうか？』

「は、はい……」

当然の如く、話を進めていくカミラに戸惑うフェイト。

カミラが落ち着いているのは密輸対策為、道路の各所に局員が配置されているのを知っているからだ。

これはカミラが配置したものであり、フェイトはこのことを知らないのだ。

『いまこちらに向かっているところよね？』

「カミラが呼んだんですよ」

なぜフェイトが地上本部に向かっているかというところから直々に呼んだからである。

呼ばれなければ、そのまま帰ってエリオ達と昼食が取れたであろうに。

『まず、パーキングに車を止めて貰えないかしら？』

「あ、はい」

カミラに言われた通りパーキングを探し始めるフェイト。止まって言わないといけないとは、重大な用事でありそうだ。

「サー、指令室より通信です」

「ええっと……」

『いいわよ出ても』

モニターに現れたのははやて不在の六課で指揮を執っているグリフィス・ロウラン。

眼鏡に内実ともに真面目と、絵に書いたような青少年である。

『いまお時間宜しいでしょうか？』

「うん、カミラも良いですね？」

話していた手前もありカミラに確認を取るフェイト。  
だが、彼女は。

『あら、グリフィス君じゃない。お久しぶりね』

『これは、メイソン提督ではありませんか』

フェイトを繋いだモニター同士で話し始める。

『カミラでいいわよ。それにいまは地上にいるから提督ではなく少将ですよ』

『失礼しました。ですが、仕事中ですのでメイソン少将とお呼びします』

『そうね、わたしもロウラン准尉とお呼びしましょうか？』

『どちらでも構いませんが……』

『じゃあ、グリフィス君で決定ね』

お互いの呼び名が決まり、二人は改めてフェイトに向き直す。  
フェイトはちょうどパーキングに着き、それまで運転に集中できたのは僥倖か。

『それで用事は何かな？』

『部隊長は無事にお着きになりましたか？』

『うん、はやてはもう向こうについている頃だと思うよ』

フェイトがはやてを下してからもうずいぶん経っている。

聖王教会の本部が徒歩でないと、いけない場所にあるとはいえ



流石についている頃ではある。

『はやてさんというと、あのヘアピンをした八神二佐かしら？』

『はい、間違えないと思います』

間違えないのは確かなのだが、ヘアピンで覚えられる、はやてもはやてである。

『そう………』

その事実を確認したカミラは憂鬱な表情を見せる。

「どうしたの、カミラ？」

『この前、うちのレオが遣らかしたらしいのよ』

「「えっ………？」」

カミラの言葉を聞いてフェイト達は固まる。

レオとはカミラの弟であり、一部で有名な局員でもある。

その素性があまり分かっていない為、色々噂が立っている人物でもある。

（はやてはレオ君と会ってたんだ……）

そして、一時的とはいえフェイトと面識のあった人物だ。

『フェイトさんもグリフィス君も、今度レオを謝らせに行くことを伝えてくれるかしら』

「分かりました、きつちりと伝えておきます」

カミラのお願いに、はきはきと答えるフェイト。  
そこからは強い意志を感じ取れる。

『ありがとうね』

「謝りにきたレオ君を少しお借りしてもいいかな？」

『自由』

微笑みあうフェイトとカミラ。

この時、グリフィスが一度も会ったことのないレオの身を案じたのは必然のことだったのだろう。

『あつと、大事なことを伝えるのを忘れていたわ』

カミラは肩を竦める。

『聖王教会の調査部が追っていたレリックが見つかったそうよ』

「か、カミラ、もう一回行ってもらえない？」

フェイトは信じられないものを見るかのように目を瞬かせる。  
本来、先立って六課に回されるはずの情報をカミラは平然と明かしたのだ。

驚くのも無理はない。

『もう一度言っわよ。聖王教会が追っていたレリックが見つかった

から出撃に備えて

」

鳴り響く機械音。

フェイトの目の前のウィンドーには赤く第一警戒態勢を知らせる文字が輝く。

「グリフィス君!!」

『はいっ!!』

『先に伝えるつもりだったのだけど、少し遅かったのかしら。フェイトさんもグリフィス君もしっかりね』

緊張の奔る六課のメンバーを後目に、カミラは机の上に置かれたティーカップを口につけるのだった。

### 第三話 管理局の幽霊（前編）（後書き）

新キャラ、カミラ・メイソン

ファミリィネームから分かる様にレオの姉に当たります。

姉弟で管理局員の彼らメイソン一族。

一族は古くから管理局で働いてきた設定です。

さて、新キャラ繋がりで言いますが第三話が終わった後、さらに3人増える予定です（涙）。

序盤からキャラを増やすのは愚の骨頂ですが、どうかお許しを。

レオ「やっと俺の出番が回ってきたか」

オウル「主人公なのに第二話までほぼ出番なしだったもんな」

アイ「主の凛々しい姿が描かれてないではないですか！ これはどういったことなのか説明して頂きたいですね、ダメ作者！」

レオ「凛々しいなどと持ち上げて貰っては困るのだが……」

オウル「名前負けだもんな、主は」

アイ「お黙りなさいオウル！！」

オウル「うげっ、やぶ蛇だったか」

アイ「お待ちなさいオウル」

オウル「追いつけるものなら追いついてみる」

作者「（お二人ともレオさんの手元で光るだけでは何も起きませんよ）」

レオ「はあ、で、作者。俺の姿を描かないのには理由があるのだろう？」

作者「はい。幽霊なら幽霊らしくなかなか姿を現さないほうがよいかと」

レオ「なるほどな……だが、読者の皆様は想像しにくくないだろうか？」

作者「その辺はもう少しの辛抱をお願いします」

レオ「それは俺にはないだろう。ほら」

作者「読者の皆様、レオさんの容姿についてはもうしばらくの我慢をよろしくお願いします」

レオ「ダメな作者だが、見放さないでやってほしい」

アイ「今日という今日こそは引導を」

オウル「ふん、お前が俺に引導を渡すなど百年早いわ！……」

レオ「締まらない……」

作者「そうですね……」

### 第三話 管理局の幽霊（中編1）（前書き）

執筆速度が上がります m ( | ) m

軽いスランプに陥っています。

### 第三話 管理局の幽霊（中編1）

Side レオ

剥き出し山肌、辺り一面に生い茂る緑。

さながら、二者を隔てるようにひかれた鉄の道。

線路の上を縦長い機械、ガジェットに取り付かれた12両編成のレニアレールが、徐々に加速しながら駆けていく。

（外周に18、内部に侵入したのが23機か……）

外壁を壊して内部に侵入していくガジェットども。

その様子を俺達は上空から見守り続けていた。

かれこれ観測を始めてから十分は経つ。

観測を続ける俺の格好は、羽織るロングコートから手先足先まで黒で統一されている。

肩口まで伸びた色素の抜けたような白金の髪と対照色でもあり人目を引くことは間違えないだろう。

本来、夜間や建造物の内部で身に着けるようにしているバリアジヤケットであるから仕方がないが。

「はあ」

「ため息をつくとき幸せが逃げるぜ」

狙撃銃へとセトアップを完了し、俺の両手を塞いでいるオウル。普段から軽口しか言わないこいつに注意をされてしまった。



この世の終わりかもしれない。

「いま失礼なことを考えてたろ！！」

「何のことだ？」

俺はオウルのつつこみに目を逸らした。

可能性は薄いけど、今から起こるかもしれない事態にも目を逸らしたいところだ。

「顔色が悪いようですが……辞退なされた方が宜しいのではありませんか？」

「いや、大丈夫だ」

俺を心配するのは右手の裾に見え隠れする待機状態のアームドデバイス。

ミニチュアの剣形状であるアイはいざという時に抜けるように、常に手の届く範囲に備え付けている。

性格はどこかの不出来なデバイスと違って、真面目なお利口さんだ。

「一度受けた任務を途中で投げ出すわけにもいかないしな」

一度受けた任務を放棄するなど言語道断だ。

失敗するにしろ、撤退するにしろ、何かしらの情報は持ち帰らないとならない。

これが俺の矜持の一つだったりする。  
故に曲げるわけにはいかない。

へん？ あの金色の魔力光は…… フェイト嬢ちゃんじゃねいか？」

「っ！？」

背中を走る悪寒。

身体中が怖気立つような感覚。

嫌な汗が体を濡らしていく。

（落ち着け…… 見つかるはずはない！）

落ち着け、落ち着け。

何のために不可視の結界を張っている。

俺の編んだ魔法に綻びなどないはずだ。

このステルスフィールドの中にいれば見つからないはずだ。

自信を持って自信を。

己を鼓舞し、言い聞かせ、何とか立ち直る。

（まずは天敵フェイトの探索からだ）

神経を研ぎ澄まし辺りを探っていく。

だが、天敵の姿を捉えることができない。

五感で感じ取れるのは制御を奪われた鉄の箱と制御を奪っている機械兵だけ。

ガジェットに気取らせない為に、とサーチャーすら配置していなかったのが仇となったか。

悔やんでも事態は良くならない。

（見つからないのならこちらにも隠れるのみ）

思い立ったら吉日。

ステルスフィールドを張っているからと言って、いつまでも見つけやすい上空にはいけない。

遮蔽物の多い地上に逃げ込むべきだ。

「オウル、ステルスフィールドを俺の周りに限定固定。それから、ステルスハイドも使用。二重掛けで隠れ」

「ぷっぷはははは」

「何を笑っている。早く仕事を」

「主、現実に戻ってきてください」

「俺は現実を見ているさ」

アイが可笑しなことを言う。

俺はきちんと現実を見ている。

現実からかけ離れたことなど考えていない。

あの“心優しくない金色の閃光”が来るのだ。

感知力の強いオウルが魔力光を確認したから間違えない。

万が一見つかりでもしたら、どんな悲惨な目に遭うか想像に難くない。

それなのにアイと来たら……遂にガタが来たか。

オウルのAIが元から壊れているのは知っていたが、まさかアイにまで感染するとはな。

帰ったらアルクが持っているであろうソフィーも含めて、全機フ

ルメンテナンス決定だ。

最悪、人工知能の初期化も考えないといけないか。

「フエイト様はまだ到着しておりません。オウルの戯言に惑わされないで下さい」

「な、につ！？」

アイに驚嘆の事実を告げられる。  
それにオウルの戯言だと……。

「オウル……お前という奴は！」

お前のマイスターである俺を謀るとは、相変わらずいい度胸をしている。  
覚悟はできているのだろうか。

「待った！ 待った！！ マジで悪かったから、許してくれ！！」

「許されると思っているのか？」

謝った程度で許されるわけがない。  
特にこいつの場合は。

「旦那、悪い冗談は止めて……」

「この怒りがまがい物だとお前は言っただな？」

面白いことを言うなオウル。

この血が煮えたぎるような感覚が偽物であると？

笑わせるな。

「じよ、冗談は止そうぜ……」

「主」

「止めるな、アイ。俺は今からこのならず者を破ら<sup>や</sup>なければなら  
ないだ」

俺はアイの制止を振り切ろうとする。

すぐにでも、こいつをスクラップにしなければこの感情は収まり  
そうにないのだ。

「今は任務中です。支障をきたすことは御止め下さい」

「どうしても止めると言うのか？」

「無論です。どうか心を御静め下さい」

「むう……」

俺はしぶしぶ拳を下すことにした。

アイが言っていることは極めて正論である。

オウルがいれば、任務の成功率も上がることだろう。  
むざむざ、こちらの利点を捨てることはないのだ。

「助かったぜ、アイ」

「あなたの為ではありません。全ては主の為です」

安堵の声を漏らすオウル。  
だが、安心するのはまだ早いぞ。  
お前の解体はすでに決定事項だからな。

「そろそろ仕事に戻りませんか、主？」

「ああ」

遣らなければならないことの順序は分かっている。  
まずは、この仕事を終わらす。  
その為に俺はオウルをリアルールに向けて構える。

「<sup>め</sup>スクリーンを寄越せ」

「了解。狙撃でもするのか？」

左耳に装着したインカム。  
そこから左目を覆うように緑色をした半透明の膜が展開される。  
オウルが軽口をたたきながらも、集めていた情報が映し出される。

「サーチャーも出すぞ」

「出さないんじゃないのか？」

「気が変わった、不可視の状態で情報収集に当たらせる。くれぐれもガジェットどもに気取らせるなよ」

今のままでは情報が少なすぎる。  
目視での観測だけだった為ガジェットの正確な数すら割れてないのだ。

「本音ではフェイト嬢ちゃんが怖いんだろう」

オウルはなぜか俺の本音を読み取る。

帰ったら絶対解体する。

8年来の付き合いもここまでか。

「にしても旦那、絶対その恰好じゃばれるぜ」

「私もオウルの意見に賛成します」

分かっていることを言うなオウル。

それからアイも賛同しないでくれ。

俺が身に着けているバリアジャケット。

これはフェイトと出会った時と、背丈こそ違えど全く同じデザインのままなのだ。

見つかった時は一目で正体がばれるだろう。

（こんなことなら新しいバリアジャケットを作っておけば良かったな）

いま展開しているバリアジャケット以外にも、すぐにも展開できるのが一種類、開発中であるのがもう一種類ある。

だが、すぐに展開できる方は主に昼間、公の場で身に着けるようになったバリアジャケットだ。

これを着て見つければ部隊長に、他の任務を食っていたのがばれることだろう。

フェイトに見つかるのと同等に避けたい事態だ。

「まあ、考えても仕方ないか……」

俺はマウント越しの光景に目を細めていく。

「任務に集中するぞ」

「了解だ、旦那（です、主）」

いま遣るべきことはただ一つ。

与えられた役目を完遂するのみだ。

Side out

\* \* \* \*

Side ???

それは最後に見た故郷の記憶。

“じゃが、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ”

“お前をこれ以上、この里に置く訳にはいかんのじゃ”

心の奥底に刻まれた言葉。



竜召喚は危険な力

私の手に宿るのは……

人を傷つける怖い力

血に染まる手を前にして、世界は暗転した。

Side out

\* \* \* \*

二つの月が浮かぶ、澄み渡った空。  
蒼穹を金の閃光が駆けていく。

「グリフィス、こっちは一足先に現場に着く」

『到着次第、制空権の確保をお願いします』

少将の要請でパーキングに到着していたフェイトは誰よりも早く  
事件現場である山岳地帯に到着していた。

そして、空には百にも下らない航空型のガジェット？型。

これから到着するであろう、新人たちを乗せたヘリが無事に辿り  
着けるようにする為、フェイトは制空権を確保しなければならなか

った。

「往くよ、バルディツシュ」

「Yes sir」

フェイトは三機編隊で飛行中のガジェット？型に近づいていく。  
ガジェット達は接近してくるフェイトを察知し、旋回。  
迎撃態勢を整える。

「H a k e n F r o m」

ガジェットの攻撃を避け、間を詰めるフェイト。  
手に構える戦斧型のバルディツシュは鎌へと形を変える。

「はああああああ！！」

フェイトは掛け声とともに鎌を振るう。  
放たれる金の魔力。  
飛翔する刃がガジェット一機を真つ二つに切り裂く。

放たれた魔法はまだ止まらない。  
自動誘導性を持つ金の刃は残り二機のガジェットに向かっていく。  
そして残り二機も、先の一機同様に切り裂かれ爆砕する。

「次っ！！」

フェイトは次の目標に飛翔していく。  
空を切る青い熱線。

ガジェットも必死に迎撃を行うが、高速移動を行うフェイトに掠

ることも叶わない。

ハ H a k e n   S l a s h }

踊るが如く、空を舞うフェイト。

ガジェットはまた一機、また一機と鎌を振るわれる度、切り裂かれていく。

『グリフィス君、わたしも出るよ』

無線から響くのはの声。

フェイトが目を凝らしてみると、まだ遠いけれども六課のヘリが近づいてきていた。

ハ大変です！   ヘリ下方より敵影補足！！！

森の中から姿を現すガジェット？型。

五機編隊の二編隊がヘリに向け飛び立つ。

「ヴァイス！」

『分かっていますよ！！！』

余裕のない声が響く。

ヘリはガジェットから逃れる為に速度を上げていく。

六課のヘリは最低限の武装を持っているがガジェットに抗えるほどのものではない。

「バルディッシュ！」

「回避を。上空から攻撃です」

「くっ！」

身を翻すフェイト。

ヘリに近づこうにもガジェットが行く手を塞ぎに掛かる。

「邪魔だあ！」

鎌を薙ぐフェイト。

迫っていたガジェットを切り伏せる。

「急ぐよバルディッシュ」

「ですが……」

危機を募らせるフェイト。

だが、フェイトを囲む敵の数は多い。

おそらく、彼女は無理をして突破をするつもりなのだろう。

「プラズマランサー、セット。ファイヤー」

十二発の魔力弾で弾幕を張るフェイト。

環状魔法陣に撃ち出された鋭い魔力弾は急激な加速を伴い敵に向かっていく。

「Defenser」

背後から迫る攻撃をバルディッシュがバリアを張り受け止める。  
その間にフェイトは前方の四機を貫いた魔力弾を操る。

「ターン」

環状の魔方陣が魔力弾を覆う。

同時にその場で停止し、フェイトが再び照準を合わせることで魔力弾は逆方向へと、フェイトの背後に向かって撃ち出された。

軌道を大幅に変えた魔力弾。

フェイトの背後に迫っていたガジェット達は為す術無く、機体に風穴を開けられる。

「よしっ！ 行くよ」

十機程度落としたところで、フェイトの視界が開けてくる。

数が急激に減った為にガジェット達の包囲網が大きく綻びが生じてきたのだ。

フェイトは自身が持つ、管理局最速とまで言われる魔法で突破を図る。

「ソニックム」

『……動くな』

重く突き刺すような昏い男の声。

念通でこの声が聞こえてくるまでは。

「何処にいる」

「どうされましたか？」

「誰がいる」

フェイトは油断なく構える。

まるで、後ろから銃口を突き付けられたような嫌な感覚を味わう彼女。

頬を伝う汗を拭うことも許されない。

『……そう固くなるな』

相変わらず念通を送り、姿を隠したままの男。

だが、先程の刃物のように鋭い声とは異なり、声音も柔らかく、若干声質も高くなっている。

それでも低い男の声であるが。

『へりはいいいのか？』

「……」

問いにフェイトは無言で答える。

第一、へりに行けなくなったのは物騒な念通を入れてきた男のせいなのだ。

『おてんば娘は掃除でもしてろ、その間にへりはこちらでどうにかする』

「お、おてんばじゃありません!!」

{サー……………}

顔を羞恥の色に染め、必死に否定するフェイト。

だが、鎌を振り回し暴れ回った後で、何を語ろうと説得力はないわけだが……。

「Defenser Plus」

「っ！」

フェイトの頭上で光が弾ける。  
降りかかってきたのは撃ち抜かれたガジェットの残骸。  
そして。

『頭上注意だ』

注意を促す声。

フェイトの頭に響く声は、どこか意地悪な雰囲気を感じさせる。

『安心して暴れている』

「後で話を聞かせてもらいますから」

『……………』

フェイトが一言放った後、念通はぴしゃりと途絶えてしまった。

「破るよ、バルディッシュ！」

「Y……Yes, sir」

いっになく荒い、主の言葉に戸惑いを見せるバルディッシュ。  
そんな相棒を掲げて、陣形を取り戻しつつあるガジェットの包囲

網へと、フエイトは鬱憤を溜め込み飛び込んだのであった。



### 第三話 管理局の幽霊（中編1）（後書き）

なんだか中途半端な終わり方になってしまいました。

なので、早めに次話の投稿ができたかと考えております。

（スランプに陥っている『なんだか最近、寝ているのに寝不足です』の為現実的ではありませんが……）

それと、第三話にして（中編1）等と何とも長くなりそうなタイトルを付けてしまっています。

この先どうなるのでしょうか？

かなり心配です。

### 第三話 管理局の幽霊（中編2）（前書き）

やはり、一週間かかってしまいました……。

なのに書いた内容は時間軸から言つとあまり進んでいません。  
小説を書くのはやはり難しいです。

さて、作者の独白はここいらにして、今回はいままでと違う趣向  
を凝らしてみました。

それでは、どうぞ。

### 第三話 管理局の幽霊（中編2）

「なのはさん！ チビども！ しっかり掴まっているよ！！」

「「「きやああああああ！！！！！」」」

大きく揺れるヘリ。

点滅を繰り返し警告を告げる赤色灯。

少女達の悲鳴が木霊する。

「ヴァイス君！ もう、少し安全な運転はできないんですかつ！！」

「無理言わないでくださいよ……」

宙に浮かび、頬を膨らませるリイン曹長。

それに涙目で答えるのは黒髪の青年。

六課のヘリパイロット、ヴァイス・グランセニック。

現在、彼は年若き少年少女の命を預かっているところであった。

「後方より熱源多数、回避運動を開始します」

「わわわわわつと！！」

「「「きやああああああ！！！！」」」

ディスプレイに警告が表示された後、機内は大きく左方向へと傾く。

「ヴァイス陸曹!!」

「俺のせいっすか……?」

「わたしからもお願い」

「なのはさんまで……」

「申し訳ありません……」

遂にはなのはにまでお願いされて、ヴァイスは肩を落とす。

ヴァイスの相棒であるストームレイダーは非常に気まずそうである。

「再度、後方より熱源発生」

「安全にだよ! 安全に!」

「ゆっくりですよ!」

「分かってますって!!」

今度はへりはゆったりと回避行動をとる。

そして。

「左脚部に被弾! ですが、航行に問題はありません」

激しい揺れがなのは達を襲う。

「何をやっているんですかっ!!」

「仕方ねえだろうっ!!」

いがみ合う二人。

その光景を見て、なのははため息をつく。

「ストームレイダー被害状況は？」

「障壁を若干抜かれただけです。問題ありません」

ストームレイダーからの報告を受け、なのははモニターへと目を移す。

そこに映るのはヘリの後方にぴったりとくっついて攻撃を行うガジェットが十機。

何故この状況に陥ったかを語るには、少し過去に遡る必要があった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*

なのはとリン、そしてフォワード新人の4人はヴァイスの操るヘリの機内で静かに揺られていた。

「みんな肩の力を抜いてね」

「肩の力を抜くです」

「「「は、はい!!」」」

「……はい!」

緊張の面持ちで顔を上げる新人達。

訓練校を出たスバル、ティアナはともかく、実践が初めて歳もまだ幼いという他ないエリオ、何より力を扱うことに戸惑いのあるキヤロはうつすらと汗をかき、緊張を隠せないでいる。

「キヤロ、大丈夫。そんなに緊張しなくても」

キヤロの様子に気付いたなのはが優しく声をかける。

「一人じゃないから、ピンチの時は助け合えるし、キヤロの魔法はみんなを守ったあげられる、優しくて強い力なんだから」

なのははキヤロの小顔をそつと手のひらで包み込む。

「ねえ」

優しく、子どもを諭すように言葉を掛けていく。

「……はい」

なのはの言葉を聞いたキヤロの顔は僅かながらも血の気を取り戻していた。

『アルト、ルキノ広域スキャン! サーチャー空へ!』

『ガジェット反応……空から!?!』

『航空型、現地観測隊を捕捉』

事件現場に近づくにつれ、六課の管制室より慌ただしく報告が入る。

『ライトニング1、エンゲージ』

そして、なのはが見つめるモニターの向こうでは、金の魔力が迸る。

先立つて現場に到着していたフェイトが制空権の確保に乗り出しているのだ。

「グリフィス君、わたしも出るよ」

『お願いします』

なのはは部隊長代理のグリフィスに出撃することを伝える。

「ヴァイス君、フェイト隊長と二人で空を抑えるよ」

「うつす！なのはさん、お願いしますよ」

ヴァイスが後部のメインハッチを開く為、ディスプレイに向かい直した時。

機内に異常事態を知らせる赤色灯が灯りと警告音が鳴り響く。

「下方より熱源が接近中。機影10」

「んなっ!？」

「どうしたの!？」

「何があつたですかっ!？」

操縦席に顔を出していたなのはもちろん、飛んで来たリインもヴァイスに状況を尋ねる。

「やられました……待ち伏せです……」

答えるヴァイスは悔しそうに顔をしかめる。

新たに表示されたモニターからはガジェットがヘリに飛来してくる様子が映し出されていた。

『ヴァイス!』

「分かっていますよ!！」

遠目でガジェットの強襲を目の当たりにしていたフェイトからも通信が入る。

「どうするつもりですかっ!？」

リインはヘリの操縦士に問う。

ヘリに積まれている武装では反撃することは叶わず、なのは達が迎撃に出るには遅すぎる距離であるのだ。

「少し揺れるかもしれないんで、ちゃんと掴まっててくださいよ」



ヴァイスが選んだのは逃走。

ヘリはガジェットを振り切るべく速度を上げていった。

\* \* \* \*

Side ヴァイス

「ヴァイス君！ 私が出るよ！！」

「ダメです！！」

「でも……」

「無事に現場まで送り届けるのが俺の仕事なんですからっ！」

俺は今にも飛び出していきそうな、なのはさんを押し留める。

ヘリの構造上や安全面から言って、回避行動をとりながらハッチを開けるのは得策ではない。

ハッチ開けるとなれば自然に速度を落とし、機体も安定させなければならぬからだ。

その隙をついてガジェットはより接近してくるだろう。

接近を許せば、ヘリを覆っている魔法障壁はAMFによって解かれ、瞬く間にハチの巣になることは目に見えている。

なのはさんに出てもらいたいの山々なんすっけどね……

一騎当千のスーパーエースが出れば、ヘリを追っているガジェットなど取るに足りないだろう。

俺は何とかなのはさんを外に出す方法を考える。

のだが……。

(見つかんねえ!!)

ヘリの操縦で手一杯ということもあり、なかなかいい案が浮かばない。

「リイン曹長、なのはさん。なんかこう、ぱっぱっとガジェットを片付けられないですかね？」

「ぱっぱとですか？」

「だから、私が出るよ!」

「それは却下で……」

なのはさん、それは最後までとっておきましょう。

「ヘリの中から攻撃とかできないですかね」

「うん、それはちょっと……」

「できるけど、撃墜できないですよ」

何とも消極的な答えが返ってくる。  
無茶な要求だからしょうがないのだが。

「あつ、でも……」

何かを思いつた様子のなのはさん。

出撃は無しつすよ。

「壁抜きの砲撃なら」

「ダ、ダメですよ、それは!!」

「ぜったいダメです!!」

リイン曹長とともになのはさんの意見にダメ出しを入れる。

何を考えているんですか!

ガジェットの前にヘリが墜落しますって。

「いやだな、二人とも。冗談だよ」

にやはははと笑うのはさん。

冗談に聞こえなかったんすけど……。

とにかく真面目に考えましょう。

俺が提案しようとした矢先。

「後部ハッチに被弾」

再び強い衝撃がヘリを襲う。

「しっかりするです〜！」

「操縦に専念して〜！」

話にのめり込み過ぎて、手元が甘くなってしまうていた。

ちなみに操縦に専念できなくなったのは半分あなたのせいですからね、なのはさん。

愚痴っても仕方ないのでしっかりと操舵管を握り直す。

後方ではいまだに砲撃でどうやら言っているエースがいるが気にしない。

追いつかれるのも時間の問題か……

モニターに目をやると距離を大分詰められていた。

やはり、ヘリと小型航空機では機動力にかなりの差ができてしまうのだ。

別のモニターではフェイトさんが一人、数十機のガジェット相手に立ち回っていた。

ガジェットの攻勢も激しいようではなかなかこちらの救援に來られないようだった。

（ここはなのはさんに出てもらおうしか）

苦渋の決断。

一か八かの賭けになるが仕方がない。

「（おい、聞こえているか？ ヘリのパイロット）」

突然、念通が届く。

それは、聞いたこともない男の声だった。

「（ガジェットどもも撃墜してやるから、ヘリを安定軌道に移せ。10カウントだ、急げよ）」

「いや、ちょっと！」

「どうしたの？ ヴァイス君？」

「どうしたですか？」

俺の声に訝しげな反応を示す、後ろの二人。

どうやら、念通は俺だけに届いているようだった。

「（10……9……8……）」

既に送られてくる念通でのカウントが始まっている。

こっちの言葉が届いてないのはわかってるので当たり前と言ったら当たり前なのだが。

にしても、この強引さ。

どこかで……。

俺は記憶の中を探っていく。

すると、思い当たる人物が一人。  
試に昔見た姿を思い浮かべ、念通を送ってみる。

「（……もしかして……レオのだ）」

「（黙れ。……5……4……）」

そこで答えたらダメっすよ……。  
正体丸分かりじゃないですか。

何の為に姿を隠し、声を変えてまで念通を送ってきているかわからないが、念通の相手がレオの旦那でほぼ間違えなかった。

「（3……2……）」

と、考え事をしている暇はなかった。

あの人ならへりごと撃ちかねない。  
遣ると言ったら、遣るのだ。

急いで俺はへりを回避行動を止め、水平軌道に移していく。

「（1……0）」

カウント終了と同時に一発の白銀の弾丸が空を縦横無尽に駆け回る。

へりを追っていた十機のカジエットは為す術もなく、たった一発の弾丸に次々と貫かれていった。

「相変わらず、半端ねえ……」

地上に落ちていくガジェットの残骸を見て、俺は密かに呟いたのだった。

＼Side out＼

\* \* \* \*

＼Side レオ＼

＼全機撃墜確認。お見事です＼

「ふう、まったく手間を掛けさせてくれる」

へりに当てることなく目標のガジェットを落としたことで、一息つく。

「やったな旦那、百発百中だぜ」

「この場合、一発十中の方が正しくありませんか？」

「一発必中がいいと思うのだが……」

先程の狙撃で使ったカートリッジの空薬莖を腰のポーチに入れていく。

ここにいた証拠を残すのもなんだし、一度使った薬莢は射撃訓練の時にでも使えば経費削減になる。

もし、形が変形して使い物にならないようなら破棄すれば問題ない。

一つ注意を上げるなら、発射後の空薬莢は非常に熱いので回収には気を付ける必要があることぐらいか。

「時にオウル。お前に聞きたいことがある」

「何だい旦那？」

「狙撃の際、生成した魔力光の色を変えなかったのは何故だ？」

俺は予めオウルに魔力の波長を変換する様に伝えていたはずだ。

「旦那、俺はちゃんと仕事をしていたぜ。魔力光も白っぽくなっていただろ」

「確かにな」

オウルの言う通り、発射した魔力弾の色は白銀へと変わっていた。だが、俺が求めていたのは。

「違う色にはできなかったのか？」

各種波形では、本来俺が持っているはずの魔力は観測されないとだろう。

オウルの偽装によって機械類は誤魔化せるはずだ。



しかし、それ以上に問題なのは人の目である。

白光の下で銀から白銀に変えた程度ではあまり意味をなさないだろう。

誤認を誤認と捉えてくれないかもしれない危険性が出てくるからだ。

「ほほう、旦那はフェイト嬢ちゃんとお揃いの金色がご希望  
ぎゃあああ！？ 痛い痛い、マジ悪かったから！！」

遂、オウルを握る力を見誤ってしまふ。

「それで他色に変換する気はあるのか？」

「赤でも、青でも、黄色でも、虹色でも何でもやりますよ」

オウルがやけっぱちに提案を始める。  
色は何色でもいいそうだ。

「なら、透明というのは」

「お言葉を返すようですが、それは如何なものかと」

珍しくアイが意見を挟んでくる。  
何か思うところがあるのだろう。

「ではアイ、何色がいいだろうか？」

「私は黒か紺色をお勧めします。余り魔力変換にばかり労を費やしても仕方ありませんので」

「うむ……」

アイが言うことは一理ある。

所詮、魔力光を変えるのは偽装の為である。

そこに必要以上の労力を費やしても仕方がないな。

唯でさえ、魔力の波長を変えれば効率がガタ落ちしてしまうのだから。

「よし、分かった。アイの案を採用する」

「で、黒か紺かどっちなんだよ」

「紺色で頼む、できるか？」

「あつたぼうよー!!」

黒に偽装してしまうとアルクの魔力光と重なるからな。  
問題ないのだけれども。

こちらの方針が決まったところで、現場に目を戻す。

空には新たに桃色の砲撃を放つ少女が加わり、あのおてんば娘とともにガジェットを殲滅している。

瞬く間に数が減っていくのは圧巻だ。

数は少ないが撤退しようとするガジェットも現れるくらいに。

そして、助けたヘリからは4人の少年少女と一匹の竜がリニアレールに向けて飛び降りていた。

「大丈夫だろうか？」

「心配ないと思いますが……」

仮にも機動課に配属されるような魔導師だから問題ないと思うのだが、少し心配になる。

リニアレールの速度は60キロ。

少女達は陸戦魔導師のはずだったから落ちれば命の保証はない。

いままで気付かなかったが、リニアレールの速度が落ちているな。アルクが要らぬ手出しをしたのだろう。

「アルクもお節介だな」

「主も人のことを言えませんがね」

「旦那もアルクもお節介病だからな」

「……何か言ったか？」

アイとオウルに何か言われたが聞き取れなかった。いかな、集中力が散漫している。

ここは己に喝を入れないと……。

「ふん！」

「ふぎやあー！ー！」

「あ、主！？」

頭に走る鋭い刺激。

それにつられて思考が鮮明になっていく。

「き、気でも狂ったか？」

「悪いな、少し気合を入れたかったんだ」

「そんなことに俺を使うなよ……」

謝ったのだから許せ。

「あの子達は無事着地したようですよ」

気合を入れ直している間に、少女達は無事着地に成功したようだ。

先頭車両に降り立ったのはオレンジの髪の少女と青い髪の少女。

……見なかったことにしよう。

遅れて最終車両に降り立ったのは赤い髪の少年とピンクの髪の少女、それから小さな白い飛龍。

歳はどちらも十歳。

ディスプレイに表示される情報を確認していく。

「若いな」

「少年は騎士見習いの様ですから普通ではありませんか？」

「そうでもないさ。現場に出てくるには早すぎるのだ」

古代ベルカに置いては十歳で騎士の称号を授かっていたようだが、現代はそのようなことはない。

そもそも、心を技を身体を鍛え始める時期が違うのだ。故に今と昔を平等に扱うべきではない。

なのに未熟な子どもを前線に出すとは何を考えているんだ、八神は。

軽い憤りを覚えてしまう。

だが、現場にいない者のことを考えても埒が明かない。いざという時にサポートに入らないとならないな、全く。

そしてもう一人の竜を連れた少女は。

「召喚士か」

こちらと同じ十歳だが、召喚士は扱う召喚獣と才能によるところが大きいので一概なことは言えない。

それでもやはり……幼い。

遠目から見ると限りでは、少女から戦う意思を感じ取れない。

おそらく、能力に精神がついてこれてないのだろう。

才能によって左右される召喚士ではよくあることだ。

となると、こちらにもフォローが必要か。

無駄な仕事が増えているような気がするが気にするまい。

「主、そろそろ移動を」

「ああ」

二度も同じ場所に留まって、狙撃を行ったからな。  
この場所を割り出されるのも時間の問題だろう。  
俺は重い腰を上げる。

「オウル」

「人を良いように使っておいて、旦那は良いご身分ですな」

急にオウルがへそを曲げ始める。  
乱暴に扱ったことを根に持っているようだ。

「解体は止めてやるから機嫌を直せ」

「げっ！ 本当にやる気だったのかよ」

「もちろんそのつもりだった」

「しゃあねいな、その代わり解体は無しだぞ」

残念だ、デバイスの機嫌を取る為に任務後の予定が一つ潰れるとは。

「Stealth Hide/Silent Move」

紺色の光を放つミッド式の魔方陣が足元に展開。  
不可視の魔法が俺を包み込んでいく。

「しっかり見届けさせてもらおうよ」

俺の本来の任務。

彼らを見守る為に、再び空へと姿を消すのであった。

Side out

### 第三話 管理局の幽霊（中編2）（後書き）

レオ「で、どこが変わったんだ？ 説明してもらいたい」

作者「前回までセリフ一行に対して地の文三行だったのを思い切って変えてみました」

レオ「ふむ。確かに……」

作者「後はセリフの増強ですかね」

レオ「後半は変わっていないように思えるが？」

作者「キャラの視点に入るとどうしても地の文が多くなってしまふことが悩みですね」

レオ「なるほどな」

作者「そのほかにも原作キャラの視点も結構難しいですね」

レオ「それだと俺の視点が簡単だと言っているように聞こえるが？」

作者「オリキャラですから」

レオ「オリキャラだ、と言って逃げたな。お前」

作者「原作キャラだとイメージを壊さないようにするのがなかなか難しいもので」



レオ「最終的にはどうせ壊れるんだろうけどな」

作者「ぐっ!」

レオ「まあ、追及はまた今度にするとして、そろそろ時間だ」

作者「あれ……掲載予定日過ぎていますね（汗汗）」

レオ「きっちり一時間な」

作者「あっ、一時間一分になりました……」

レオ「こんないい加減な作者が書く物語だが、次回もよろしく頼む」

作者「ご意見、ご感想待っています」

### 第三話 管理局の幽霊（中編3）（前書き）

皆さんお久しぶりです。

三週間ぶりの投稿となります。

まずは二週間も更新をサボってしまっすいませんでした m（

—）m

不甲斐ない作者をお許してください。

内容が決まっているのに筆が進みませんでした。

作者「自らの非力さを感じるばかりです」

作者「！？ って、何でセリフに！？」

某海洋生物が迫ってくるようなBGM。

作者「ひいひいっ！」

????「見つけたよ」

作者「あなたは……」

????「なんで二週間も投稿サボったのかな？ 正直に言っと弁解の余地はあります」

作者「それは……」によ「によ」

????「ダメだよ、そんな理由で手を抜いちゃ。取り敢えず、O

H  
A  
N  
A  
S  
H  
I  
だ  
ね

作者「いやあああああああつ！！」

後書き、につづ  
k u  
。

### 第三話 管理局の幽霊（中編3）

Side アルク

僕達は現在、暴走列車の7両目。

保護対象のある重要貨物室に単身潜入しているのですが……。

「暇」

「そうだね」

然るお方から依頼のあった保護対象の搜索、封印。

また、一部の車内カメラの停止など偽造工作も終えて手を持て余しているのです。

「アル君しりとりでもしよっか」

「それはもうやったでしょ……ってか、アル君って呼ぶの禁止！」

「ぶ〜ぶ〜。アル君の意地悪」

ブレスレット状態のソフィーがぶう垂れる。

アル君の語源は言わずと知れるもの。

名前のアルクと接尾語の君を合わせてアル君。

僕としてはちゃんとアルク君と呼んでほしいところです。

「しりとり」の“り”からね、リング

「グローブ、ってなにしりとり始めてるの!」

「暇だからに決まってるじゃない。ブルドッグ」

「暇なら他のことをしようよ、例えばモニターで外の様子を見たりさ」

外では激しい戦闘が繰り広げられていることでしょう。

幾ら車内で保護対象の護衛を任されているからと言っても、外の様子は気になるところです。

「アル君いまさら何言ってるの? 外の観測はずっと前からやっているよ」

ソフィーは呆れたような声で言い返すと、次々モニターを映し出していきます。

「いつの間にサーチャー出したの?」

「そんなの潜入するときに決まっているじゃない。ほら、早く“ぐ”だよ“ぐ”」

あれ、僕はそんな指示出した覚えがないよ。  
有って迷惑になる物じゃないんですけど……。

「グレーブ、ソフィー助かるんだけど、せめて一声かけてね」

「面倒くさいからやだ」、アル君が見落としてることのフォローを報告していたら切がないよ。プレート」

「トレード、面倒くさいからって……僕が不甲斐ないのも分かるけど最低限の報告は頼むよ」

自分のデバイスが行っていることぐらい知っておくべきです。ソフィーの不手際があった時に、後始末に奔走するのは僕の役目なのですから。

「レオが狙撃をしたことと言った方がよかった？ ドブ」

「はあ！？」

「アル君、声が大きい」

「う、ごめん」

驚きのあまり大声を出してしまう僕。

全く何をやっているですか、あの人は！  
また、要らない仕事を増やして。

怒り心頭に発するとは当にこのことでしょう。

「アル君、落ち着こう。“ぶ”だよ“ぶ”」

「分かったよソフィー、落ち着くよ。でも、しりとりはもう止めないかい？」

「ダメ、アル君がソフィーに勝つまで終わらないのです」

「それって一生じゃないの？」

未だ僕はしりとりにおいてソフィーに勝利を収めたことはありません。

当然至極。

普通に考えてそれは仕方がないことです。

人間と機械、この差は歴然。

記憶量に置いて人がAIに敵うはずもなく、処理速度もまた然り。

唯一残された点は柔軟性で勝つことなのですが、それも初めてソフィーとしりとりを遣った時に看破されてしまったのです。

このデバイスはどれだけ優れているのでしょうか……。

つくづくこんな遊びを教えるんじゃないかと後悔する次第です。

ふふっふふっふ、アル君は一生ソフィーには敵わないのです。

さあ、負け犬よ、そこにひれ伏しなさい。

「いや、止めておくよ」

きっぱり断っておきます。

何故、しりとり如きでそんな無様な真似をしないといけないのか理解し難い。

何よりソフィーの前にひれ伏すなど無理難題。

物理的に不可能です。

この無駄に高性能なデバイスは僕の腕に巻き付いており、仮にひれ伏したとしてもソフィーの前にひれ伏すのではなく、ソフィーの上にはひれ伏すことになりません。

はつきり言っておかしいでしょう。  
理解不能な状況が造りだされるのです。

まあ、ソフィーを一度外して僕の目の前に置けばできないこともないのですが……。

「アル君には拒否権ないんだよ」

「なら、拒絶権発動」

「……なにそれ？」

「拒否権の上位権限」

「……………」

視線が痛い。

当然デバイスだから目なんて付いてないはずなのですけれども、  
妙に痛々しい視線を感じます。

「どうしてこんな子に育っちゃったかな？」

「僕は君に育てられた覚えはないのだけど……」

「また、反抗的な態度を取って……！」

事実を述べた途端、機嫌を損ねるソフィー。  
困ったものです。

「ふんっ！ そんな態度ばかり取っていると、“あれ”をばら撒



「いちゃうんだから!!」

「ちょ、ちょっと待ってよ!? 僕が悪かったから、それだけは勘弁して!!」

“あれ”とはソフィー曰く、【アル君の私生活日記】。

タイトルを聞くだけでも呆れてしまうのに、中身を見たときには正直声が出てきませんでした。

あれは私生活日記ではなく、僕のことに関する暴露本のようなものだったのです。

個人ステータスはもちろん、普段の生活から知られたくないような過去の失敗談に気になる異性、挙句の果てには口外してはならないような内容まで……。

暇だからと言ってこのようなものを文体に纏めるのは止めてほしい。

その時以来の切実な願いだったります。

そんなものが出回れば大惨事なのですが、こちらに留める術はありません。

ソフィーならネットワークを通じて一瞬の内に情報を拡散させることぐらい容易なことなのです。

つまり、僕の運命はこの憎たらしいデバイスの掌の上。  
主導権はあちらに握られているです。

「アル君が泣いて頼むなら止めてあげてもいいけど?」

「お願いします!! できれば、二度と目の見ないようにお願いします!!」

もはや、プライドもあつたものではありません。

僕は【アル君の私生活日記】の封印を頼み込みます。  
元々あるのはちっぽけなプライドですけれど……。

「まあ、しょうがないか。でも、これはちゃんと保管しておくね」

「うう……」

思わず呻いてしまいます。

相手に弱みを握られたままなんて生きた心地がしません。

「じゃあ、しり通りの続きをしょー！」

「分かったよ……」

何故しりとりなのか……。

理由は明白。

相手をじわじわ追い詰めていく、詰まる所相手がもがき苦しむ姿  
を見るのが好きみたいです。

このデバイスは。

どうにかしてこの性格が直りませんかね。

今度、製作者<sup>レオ</sup>に相談でもしてみましようか

「さあ、アル君“ぶ”からだよ！」

「ブドウ」

「ぶっぶー！！ アル君の負けー！ さっき自分でグレープって出したよね？」

「違う、葡萄じゃなくて武道だよ」

「むう、紛らわしいな」

「またもや不機嫌そうな声を出すソフィー。」

「常に勝っているんだからこれくらい認めてくれても……。」

「はっ！　しまった！！」

「つまらない意地を張ったばかりにしりとりが長引いてしまいました。」

「不覚です。」

「ウイング。言い忘れたけど、アル君には十秒ルール追加だからね」

「へえっ！？」

「長時間の中断にさっきの件が加わったから当然だよ」

「くっ！」

「理不尽しか言いようのない仕打ち。」

「最初の内は少しきつい位でしょうけど、後半になってくると鬼のような効果を発揮するはず……。」

「やはり、このAIはエグイことをしてきます。」

「それと……」

「……それと？」

間を置かんとばかりの意味深なソフィーの言葉に僕は息を呑む。  
まさか、これ以上ハンを増やすとか言わないでしょうね。

「へしも、アル君が勝つようなことがあったら」アル君の私生活  
日記」を消したあげる」

「っ!？」

甘い誘惑。

その言葉を聞いた瞬間、僕の身体に衝撃が奔った。

「いいでしょう! 遣りましょう! ソフィー負けてから前言撤回  
はなしだよ!!」

へへへ、へへ

湧き上がる闘志。  
燃え上がる熱意。  
いま此処に、負けられない戦いが幕を開けるのです。

Side out

\* \* \* \*

「たああああー!!」

掛け声とともに勢いよく鉄の地面を疾駆する少女。

スバル・ナガシマは柔軟な四肢を用いて、リニアレールに侵入したガジェット達を次々と力技でねじ伏せていく。

「リボルバーシューウーート!!」

薬莢排出の後に右手のリボルバーナックルから放たれる衝撃波。それはガジェットの持つAMFを易々と貫きガジェットに命中する。

衝撃波を受けたガジェットは機体に大穴を開けて、静かに沈黙するのであった。

「ふう〜、これで終わりかな？」

「現車両に敵影なし。お見事です」

この車両を鎮圧して一息つくスバル。

それに答えるのは相棒のマツハキヤリバー。

スバルの履くローラーシューズの中央にある宝石型のコアがきらりと反応する。

マツハキヤリバーの言う通り、スバルはここまで華麗な快進撃を続けている。

壁をぶち壊したり、天井を突き破ったりと少々過激ではあったが。

何はともあれ、少女は五両目までの制圧を完了したのである。

「（ティア五両目まで制圧終わったよ）」



リニアレールの中から天井を突き破つての攻撃であつた。

それに対して、スバルは単身でリニアレール内に突入。

ティアナと現場の指揮管制を取るリインは外に湧き出てきたガジェットに対応と現場把握を行う。

事が出来たのは最初だけであつた。

一両目のガジェットを数機撃破したスバルは勢い余つて天井を破壊。  
壊。

そのまま、外に放り出されてしまう。

マツハキヤリバーの機転によりスバルはウイングロードに乗り、列車上へと無事帰還。

だが、着地したのは三両目。

線路の上を走るリニアレールと真逆に進行するスバルは後方へと流されてしまつていたのだ。

さらに運が悪いことに例の如く、三両目に降り立つたスバルを待つていたのはガジェットの歓迎。

スバルはそのまま戦闘に突入。

何も考えず戦闘を続けていたスバルは流れに乗るに乗つて五両目まで来てしまったのだ。

当然、一両目の残党狩りと二両目の制圧を行つたのはティアナになる訳で……。

「（あんたはいつもそんなのよ！ 我を無理矢理でも押し通すし、指示がなかったら我武者羅に猪突猛進を繰り返すし！！ ああ、もうー！！ 指示がなくても、少しは考えて動きなさいってのー！！）」

「（うう……ごめん、ティア）」

怒りを爆発させるティアナに、スバルは只々平謝りをするしかなかった。

「（まったく……もうすぐそちに合流するからそれまで待つてなさい！）」

「（でも、ティア敵が出てきたときは）」

「（い・い・わ・ね！！）」

念を押すようにスバルに言い聞かせた後、ティアナは一方的に念通を切ってしまった。

そして、念を押されたスバルはと言うと。

「頭がくらくらする」

ティアナの大声によってノックアウト寸前まで追い込まれていたのだった。

\* \* \* \*

Side レオ

万が一のことを考えて、リニアレールの近く。  
山岳の頂に降りて観測を続けるのだったが……。



「嫌でも目に入るな……」

視界から外しているつもりなのだが、青髪の少女がリニアールの破壊を行っている光景がちらほら目に飛び込んでくる。

ガジェットと少女のどちらかが襲撃者かと判断するならば、間違えなく後者と答えるだろう。

傍から見ればどう見ても少女が破壊活動を行っているとしか思えない。

本人にそのつもりはないとしてもだ。

「これは八神嬢も頭を抱えている頃じゃねえか？」

「そうだな」

オウルの意見に賛同する。

まさか、八神もこれ程の爆弾を抱えているとは思わなかっただろう。

幼き騎士の事と言い、青髪の少女の事と言い、つくづく読みの甘いやつだ、あいつは。

「はやて様もお若いですから」

「それだけでは口実にならないぞ」

機動課の一部隊長の座。

そこにどれだけの重みがあるか知っているだろうか。

些か疑問である。

回収物の中には下手をすれば、複数の次元世界を崩壊させかねない代物もあるのだ。

その危険物の回収という管理局内でも、重要な役割を任される機動課の隊員に選ばれることは、ある意味名誉である。

部隊長ともなれば尚の事だろう。

良く言えばエリート中のエリート、悪く言えば歳不相応。

幾ら実力主義の管理局だとしても若干19歳で部隊長を任されるのは……異例かもしれない。

似たようなケースを知っているだけに何とも言えないのだが……。

何はともあれ、部隊長になることを八神が望み、周りが認め、局が任せているのだからこれ以上言うことはあるまい。

不測の事態に対処し損ねようと、彼女の實力不足なのであるのだから……。

「旦那は相変わらず手厳しいな」

「そんなことはないさ。俺はただ状況を鑑みた上で、冷静な判断を下しているだけ」

「それが手厳しいんだつつの」

「……………」

うむ……。

どうしたことなのだろうか？

オウルがちゃらけることはあっても、こつ真面目に忠言を行うことは数少ない。

俺に助言を与えてくれるのはいつもならアイのはずである。

それなのに今日は……。

不真面目デバイスの戯言を一度聞き逃し、あまつさえ忠言を受けてしまう有様。

「まあ、口ではあれこれ言っても、いざ行動するとなれば自分の言葉を反故にする様な行動をとるわけだが……」

「それが主なりの優しさですから」

さらには、幻聴まで聞こえてきた。

いかな、疲れているのかもしれん。

早めに切り上げて休むことにしよう。

最近の不摂生な生活を呪いながら再度目標に意識を集中する。

「ここでは射角が悪いな……」

断続的に岩陰になってリニアールを常時補足できない。

普段ならこのようなミスはないはずなのだが……。

やはり、調子が悪い。

「オウル、次の狙撃ポイントは？」

「検索済みだぜ！ 感謝しろよ」

「ああ、助かる」

「！？」

いつの間にかポイントを探し終えていたオウル。

場所は……頂の小さな谷間か。

開けた場所ではあるが、切り立った岩肌が自然の城砦を思わせる。上空よりは視野が狭いそうだが、隠密性に優れた場所のようだ。

真面目にやればできるじゃないか、オウル。  
少し見直したぞ。

「旦那が遂に感謝の言葉を！」

「何を言っているんだ、行くぞ」

「感動するのは分かりますが、いまは先んじてやる必要があるでしょう？」

何やら一人（？）感嘆の声を上げるオウルに釘をさす。

「旦那が人に、特に俺に対してお礼を言うなんてめったなことではないだろー！」

「確かにその通りではありますが……」

「だろ！　だろ！」

「……………」

盛り上がるオウルを他所に俺は無言で地面を勢いよく蹴った。

全く、失礼な奴である。

少し褒めたら調子に乗りおって……。

（まあ、二割増しのメンテナンスで我慢してやるか）

俺は誰にも分からないぐらいうつすらと笑みを浮かべ、オウルの処刑を再度決心するのだった。

### 第三話 管理局の幽霊（中編3）（後書き）

レオ「突入するぞ、アルク」

アルク「ちょっと待ってください、まだ牛乳を飲み終わっていません……」

レオ「3……2……1……突入！」

アルク「って、人の話を聞かずに突入しないでください！！」

レオ「作者、二週間の放置という暴挙。覚悟は」

アルク「どうしたんですか！？」

レオ「一足遅かったようだ」

アルク「これは……もしかして、レオが！？」

レオ「お前、人の話を聞いていたか？ この様子だと、死後二時間余りか」

アルク「容疑者から話をお伺いすることはできませんでしたけど……だとするといつも通りですね」

レオ「いや、今回は俺達が捜査に当たろう」

アルク「へっ！？ どういう風の吹き回しですか？」

レオ「なに、作者がそのうち蘇生するからそれから話を聞けばいい。なに、これ以上に楽な仕事はなかるう」

アルク「……………」

レオ「とはいええ、捜査はきちんとやる。犯人を割り出すのかこいつの蘇生とどちらが早いかわかるのも、また一興であろう」

アルク「……はあ、良いですよ。お供いたしますよ、レオ」

レオ「なつとらん!!」

アルク「今度はなんですか……」

レオ「捜査の間はメイソン卿と呼びなさい」

アルク「は、はあ……分かりましたメイソン卿（また、始まったよ。年に一度ぐらいある悪ふざけが……）」

レオ「宜しい、アルソン君」

アルク「なんですか、その取ってつけたようなネーミングセンスは!?」

レオ「アルソン君の言う通りだが、何か不満かね？」

アルク「……もう、いいです。とつと捜査を始めましょう」

レオ「うむ」

前書きと後書きのショートストーリー。

迷探偵レオ・メイソンとゆかいな仲間たち。

次回につづく(?)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4467w/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～灰より生まれし王～

2011年10月31日02時30分発行